

■原宿にて徒然に(その2:臨床)■



1992年3月22日

Dr. H.A.先生

拝啓

春の嵐やら雪やらと気候が不順ではございますが、少しずつでも春めいてきているのが嬉しく感じられる今日この頃ですが、お元気でいらっしゃいますでしょうか。長らくご無沙汰致しております。

先生から以前に私どもへ分析治療のご紹介いただきました方々について、これ迄も時折にまだお通いであることには触れた覚えがございますが、それが今月末に、お二人共お揃いでようやくにして治療終結致しましたものですから、是非とも先生にご報告をと思ひ付きましたような次第です。

ご記憶されておいででしょうかしら？

ご紹介いただきました方々は、Miss.S.K.さん(1984年7月頃、当時18歳・診断名:摂食障害)、もうお一人はMr.I.Y.さん(1986年10月頃、当時28歳・診断名:乗り物恐怖)です。

Miss.S.K.さんは、現在『〇〇医療技術専門学校』で衛生技師を目指して目下奮闘中であります。Mr.I.Y.さんは、フリーのイラストレーターとしてこれ迄順調に実績と信用を積み重ねておいでで、つい先日もサンリオから出版された絵本がとてもいい反響であったとか。近い将来『絵本作家』として売れっ子に

なるかも知れない期待やら希望があり、益々意欲を燃やしておいでです。お二人どちらも、生きることの地盤固めを着実になさっておいでで、ひとまずは己の立ち位置が定まった感が致します。更なる内的陶冶は、今後それぞれに生きてゆく場において期待されましよう。

医療機関からご紹介された方々は、私が契約関係にかんがみ、互いに対等として、病人らしくなど一切扱いません為に、やはり戸惑われるのか、治して貰う為に来ているという建前がなかなか崩れませんで、どうも概ね分析の場に根付くことが難しいと言えますのに、稀有にもこれらお二人は共に踏みとどまってくださり、一応充分と言える時間を費やしてご一緒に分析作業に取り組むことが出来、ごく自然な、無理のない終わり方を迎えられることは、私にとってもとても幸せなことだったと、振り返り改めて感慨を深めております。

臨床において、「人は如何にしたら治るのか」という観点ではなくて、「人は如何ようにして育まれるのか」という観点が欲しいと思うのです。一人ひとりが、蹉きを抱えながらも、健やかに生きてゆこうとする、そうした懸命な姿に、これからも心理臨床家として寄り添ってゆきたいものと念願してやみません。

これ迄先生からのご支持・ご支援賜りましたこと、改めて感謝申し上げます。ずうっと先生には何かしらお礼をしなければ気が済まない思いでありながら、どうも気恥ずかしさが先立って、ご無礼を重ねてしまいまして、どう

ぞお許しいたきますように。此の度のこともありまして、お祝い気分であまり思い切って、ほんのささやかで申し訳ございませんのですが、ここ【原宿リビン】の一階にありますフランス菓子店の品を少々お送りさせていただきました。ご笑納いただければ、嬉しく存じます。

それから、ご迷惑とお思いくださらなければよろしいのですが、ここに私どもの最近の《ご案内資料》をも同封させていただきました。近頃、ごく普通に社会適応している方々の中でも、自分に繋がるための、さらには人に繋がるための言葉の不足・貧困さが一般現象として目立って顕著になっているような印象がございます。教育の現状批判はともかくも、これからの日本人の行く末に一抹の危うさを抱くような思いがあり、「ああ言葉が欲しい、言葉がもっと欲しい」と切実に感じておりまして、ご承知の通り、私の分析技法の特徴から言ってどなたをも対象にということはおそらく難しゅうございましょうけれど、今まで通り「無理させない・無理しない」というスタンスを堅持しながらも、まずは私自身が開かれてあることを念願致しております。そのような趣旨においても、先生との繋がりでいつか又新たなご縁が期待できることになりましたらば、とても嬉しい限りでございます。

今後共宜しくお願い申し上げる次第です。では ご機嫌宜しく。

敬具

山上 千鶴子

.....



1992年9月8日

Prof. T.M.先生

拝啓

例年にない今夏の長引いた残暑もこれようやく過ぎましたようで、待ち焦がれた秋の気配が殊のほか嬉しい今日この頃でございます。

先日の『日本心理臨床学会』大会ではわざわざ会場までご足労いただき、大変恐縮致しております。お目にかかれて本当に嬉しゅうございました。《学会》というのはまるで馴染みがなく、私にとっては外国のようなものですから、先生のお懐かしいお顔を目の前にして、何やら一瞬、ロンドンという異国で自分一人が外国人という状況にあって、そこにアメリカ留学からの帰途ロンドンに立ち寄られた先生と親しくお話できましたあの当時の心慰められた思いがふいと蘇りました。あの節先生とご一緒に例の赤い2階建ての乗合バスでGolders Greenに繰り出してのフロイト墓参もほんと懐かしい思い出。そんなあれやこれや彼地での記憶に引きずられて、我が同胞とともにありながら、いつまでもシャイだの人見知りだのと言いつつも何かおかしいのですが、どうも億劫になりがちな自分がございますの。

まあそう言っても、タビストック在籍中は、セミナーで症例なり観察報告など発表の機会にごく頻繁にありましたから、人前でしゃべるのに場慣れしていないというわけではなく、今回何も英語で話すわけではないのですし、随分と楽な気分でした。

しかし日頃「心理臨床」という場で、

相手を熟知し得るだけの時間の積み重ねの中で通じ合いに専念している身にしてみれば、やはりああした場というのは、語る方・聴く方の双方にとって極めて乱暴なコミュニケーションという感慨は否めませんわけです、頻りに面映いというか、一抹の虚しさや寂しさすらも感じられてなりませんのです。

実は、今回ご依頼があり、座長をお引き受けしました私の意図と申しますのは、これ迄私の臨床の拠りどころなり技法なりについて、纏まったかたちで公の席でお話することも致しませず、出版物にすることもお誘いはあったものの固辞してましたから、帰国後に開業しまして以来、お付き合い下さいました専門職の方々には、戸惑いやら懐疑やらと、随分と難儀をお掛けしたのではなかったかしらと今更にして思うわけでありまして、無論今回は〇〇先生の症例発表(《標題: 集団不適應女兒の攻撃性とセラピストのこころの変容》)との関連ではありましたが、私の分析家としての見解を皆さま方に些かなりとも纏まったかたちで聴いていただいい機会になるかと思われまして、『日本心理臨床学会』の会員の方にはご連絡可能な限りご案内させていただき、お越しいただいたようなわけなのです。本学会の会員以外の方々につきましては、いずれ又このような機会が近い将来あるとも思われません為、今回私がコメントとして会場で読み上げました資料のコピーをお送りさせていただくことと致しました。ついだと申しますと変ですが、先生にもぜひお暇な折りにでもご一読いただければ嬉しく思いますため、ここに同封させていただきます。《臨床(実践)言語》を磨くために、これ迄はむ

しろ「スーパービジョン」すらも避けて極力お断りしていた嫌いがありましたけれども、そろそろ《解説言語》にも意欲を抱いてまして、新たな取り組みの段階に入っているような気がしております。その意味でも今回の大会参加は私にとって良い契機になったと言えましょう。

では、どうぞご機嫌宜しく。 敬具

山上 千鶴子



1992年10月20日

Prof. B.K.先生

前略

お手紙拝見致しました。いつもながらの先生のお心遣い、大変嬉しく、厚くお礼申し上げます。

さて、お薦めいただきました大学の講師の件、どうも今の私には不似合いな気が致します。お断りするしかないと思われまして。

その理由としましては、時機尚早というばかりではなく、まず第一に講義というかたちで、不特定多数を相手に、手許に予め用意された言葉で語るのに慣れることの怖さが挙げられます。 そのような<解説言語>とは、一瞬一瞬眼の前の被分析者の言葉を耳にしなが、それを咀嚼し脈絡を探り、その中に一筋の方向へとの的を絞る分析作業で使われますところの<臨床言語>とは、本来異なる種類のものであるように考えられます。私は、まだまだ臨床実践の中での「精神分析家としてのかたち」を模索し、その修得を志す身であります以上、現時点では解説・評論に

気が奪われることはまずかろうと判断されるのです。

更には、実際の分析の体験を抜きにして、情報としての『精神分析』だけが幅を利かせるといった一般的風潮には抵抗を覚えるわけでありませぬ。ああ、ナンダ！精神分析ってそんなものかあ・・！と解ったつもりになりたい。それでその後は、何も無いとしたら、唯々虚しい気持ちが致します。

私個人としまして、後進の育成という点では、タビストックで先輩諸氏に蒙った恩義に報いる意味でも、それなりの責任を担わされていると自覚しなくもありません為、これ迄も『教育分析』及び『個別スーパービジョン』といった窓口は、一応設けてございます。

但し、『個別スーパービジョンPrivate Supervision』については、これ迄多くの方々とお付き合いして、実のところ、その成果には殆ど満足しておりませぬで、どうしても限界があるといった感懐は否めませぬ為、私自身今後はお引き受けすることにさほど乗り気ではありません。やはり自分というものを叩き台に乗せることでしか、『精神分析』は、‘己を生かす糧’あるいは‘己を導く指針’になり得ないという思いが、いっそう募っております。

そうしたプロセスを省いての『精神分析』は、単なるお勉強の域を出ないといった印象です。職業訓練が故にではなく、学問追及でもなく、資格取得のためでもなくて、自分が『精神分析』を通して、どのような人として形づくられてゆくのかといった無謀ともいえる挑戦を魅力的に覚える方(あるいはそれを切実に欲される方)にしか、私は関心が向きませぬ。た

ぶんそれは、組織(あるいは群れ)に帰属していれば、我がままとして通用しない筈です。こうした一見我がままとも引込み思案とも取れる私の態度は、実は、私の帰国後間もなくドクター・メルツァー率いる分析家グループ(私自身のかつての教育分析家Training Analystもその一人でした)が、大挙してロンドン(即ちタビストックとの絆)から離れ、その分析活動の拠点をオックスフォードに移したという‘事件’に、深く影響されております。それが、精神分析家としてのかたちを守りそして全うするべく一つの選択(あるいは決意表明)であったと推量するからであります。しかしながら、群れることで馴れることを忌避したとしても、‘連帯’は、私にとっても絶対に不可欠だと重々承知しております。と申しませぬ、実際何ら約束も保障もないわけですから、私自身物凄いい心臓だと内心忸怩たるものがありますのですけれども、今のところはごく僅かながらもお付き合いし甲斐のある方々に恵まれ、ご一緒に仕事が出来ますことに有り難く満足しているような現状です。潰しのきかない、言うなれば愚直さを、私はむしろ好みます。それが即ちタビストック流儀であり、又、私流儀でもあると心得ているような次第なのです。

お断りする申し訳に、あれやこれやと並べ立てまして、我ながらその窮屈さには内心呆れております。どうぞよろしくご寛恕くださいますように。ご機嫌よろしく。 草々

山上 千鶴子



1993年1月10日

Dr. N.T.先生

拝啓

寒中お見舞い申し上げます。
早々に賀状を頂戴致しまして有り難うございました。

貴方からは、こちらでの教育分析
(Personal Analysis)の終結以来、これ迄の
過去何年来も年明けにご丁寧なる年賀のご
挨拶状をいただいております。私の今の立
場で貴方に果たして何を語れるものかと逡巡
やら羞恥やら覚えまして、つついご返事を出
し損ね、ご無礼を重ねましたこと、どうぞお許し
くださいますように。ここにようやく遅れ馳せな
がら一言述べさせていただきますね。

これ迄も、そしてこれからも多分ずう
つと貴方の裡で、『己を育むところの糧なるもの
が、そして己を正しく導くところの指標なるもの
が真に何であり、又どこに見い出され得るの
か』が問い続けられておいでである、と私は理
解しております。そしていつの日か、貴方の求
めて止まないそれが、遂には己の外に在(あ)
るのみならず、己の内に見い出されんことを一
途に信じ、さらに邁進されますように、私は祈
っております。

臨床家としての生にとっては、己が
関わりを持つ総てのもの並びに人は、飽くまで
もそうした希求がための‘契機’として在る(む
しろ、‘契機’でしかないと言っても差し支え
ないのでは)と、私は考えております。事実、
私が或る一時期、《教育分析》の名の下に、
貴方にお付き合いいただきましたことが、私と

いう固有性の自発自展において、そうした意
味での‘契機’を充分孕むものであったと回顧
されるのです。真にそれが故に私は、今尚貴
方に対して恩義を感じ、深い感謝の念を抱き
続けておりますことを、ここに是非お伝え致した
く思いました次第です。生ある限り、共に精進
してまいりましょう。

敬具

山上 千鶴子



1993年8月22日

Dr. H.A.先生

前略

ようやく夏らしい陽射しと思えば、もう
既に何やら秋めいた気配も感じられる今日こ
の頃ですが、お変わりございませんでしょうか。

先日はMr. N.K.さん(診断名:対人
恐怖症・25歳)を分析治療にご紹介いただき
まして、誠に有り難うございました。昨日、『診
断面接』にお越しでしたので、ここに経過をご
報告させていただきます。

本人も<ここには(Dr.H.先生に)誘
われなければ来なかった>と申していますよう
に、『精神分析』への動機づけは今一つであり
ました。外界との関わりの希薄さ、自己認識
能力の曖昧さといった点でも反省なりもしくは
苦悩しているといった素振りは一向に見せませ
んで、表面上エリート路線を一応無難にこな
して来ただけに、有利に立ち回るコツはわきま
えておるといふ自負もありそうでした。従ってそ
こそ器用に内側の蹉きは片付けられ、かつ遠

ざけられてもおり、自覚されるには至っておりませんようです。人間関係に抵抗も摩擦も衝突も葛藤も無し(!)ということらしく、<いつも冷めていたいと思っている>とは本人の言葉です。私が総括として彼に申し上げたことは、選ぶ・選ばれる(求める・求められる)といった(人と自分との)関係性が盲点であるということです。そして尚彼自身の中に選ばれたいという意欲、選ばれようとする姿勢が欠落しているということを指摘した次第です。小学校当時から成績は優秀だったらしく、学級委員で注目される存在だったとかで、それが中学に行ってから途端に友達からそっぽ向かれたという苦い体験があり、それに対応できなかったという後悔も多少吐露したはしたものの、そこには自分の方から進んで選ばれようと決してしなかった己を反省するほどの痛みが些かでも垣間見られるということは無いわけです。更にはそこから(自分に対しても他人に対しても)毒にも薬にもならない、拗ねた自嘲的な生き方を本人が選ぶに至ったとしても、それは人一倍‘選ばれたい’彼であるだけに、極めて道理だと思われる次第です。そして自分が生きて残るものと言え、どこに出しても恥ずかしくないご立派な履歴書だけということらしいのです!!お気の毒というか滑稽というか。これも‘エリート’の宿命と言え言えるのでしょうかしら。

かくして一時間余の面談の最後に、さてと言うことで、こちらで分析を受けるということで改めて本人の意思を確認しましたところ、<もう少し積極的になれたらいいと思って・・・(Dr.H.先生のところで)2、3分の話じゃあ(物

足りない)と思ったので・・・>と言葉を濁すので、それでどう違いましたかと訊きますに、<同じ・・・>という素っ気ないお返事でしたの!従いまして、同じということならわざわざこちらに来ることもありませんでしょうし、これ迄通りDr.H.先生の診察にお通いなさるのが宜しいでしょうと伝えますと、本人はあっさり承諾したという具合でして、ちよっぴり‘漫画的’でした。結局は、[選べない・選ばれない]ということに尽きるわけです、改めてこれが彼のいつもの反復パターンであると確認した次第です。

「どのようにして自分の生きることを選ぶか」という点からしても、彼は、現代の若者の一つのサンプルと言え言えなくもありませんでしょうし、それなりに興味深く思われたのです。但し、私がこちらでこれ迄関わりを持った『対人恐怖症』の患者との体験を通して言えば、‘毒(攻撃性)’がこれ程に見事に抹消されているということがむしろ無気味と言いますか、本来はこんなものである筈はないといった違和感がございました。それは単なる現代エリート若者気質と片付けられない、深刻な何かがあるのだらうと推察致しますけれども、「触るな、いじってくるな」というメッセージしか聞かれませんが、それ以上私の出番はないと心得るしかありません。彼の内側のありとあらゆる‘毒’が抹殺されたということが、過去5年間の薬のお陰であり、そのことが彼自身認めるように、彼の適応の助けになっているのは否定できないとしても、その結果自らを(無論他人については言うに及ばず)非人間的に扱うということになるに至ったならばと、ふと私は痛ましく

辛い気分になったのです。やはり優秀な人材であるわけでしょうから、惜しいというか勿体ないというか哀しいというか、幾ばかりかの気掛かりは残ります。自分が自分と一体どういう‘取引’をしているのか、人は時折立ち止まってみる必要があるのではなかろうかとしみじみと感じた次第です。たぶん将来いつか一般向けに『精神分析入門』の本を書く機会もあるでしょうから、私の頭の片隅のどこかにこれらの記憶を留め置いておくことと致しましょう。

ここ最近、時折懸念を抱きますことは、長期間「精神安定剤」を服用している方々を対象とした場合、私のように、『精神分析』の名の下に、徹底して自覚(考えること)を促すところの技法では、些か無理を感じるということです。果して『‘治療ではない’精神分析』は、この日本という土壌には根付かないものかどうか、日本人がどういう未来を選び取ろうとしてゆくのか、どういう人間として生きようと選択してゆくのかを見据えつつ、次ぎの世代に何を遺せるか私もそろそろ覚悟を準備してゆかなくてはならない、そんな年齢なのだという風によくにして想う昨今であります。

それでは、どうぞご機嫌よろしく。

敬具 山上 千鶴子



1993年12月10日

Dr. F.T.先生

前略

此の度は、ご尊父さまのご逝去を伺

いまして、謹んでお悔やみ申し上げます。恐らくは奥様の方のお父上さまなのではと思われましてけれども・・。

貴方がこちらでの教育分析Personal Analysisを終了なされてから随分と経ち、近頃は貴方がどのようにお過ごしなのか、近況を耳にすることも久しくございませんでしたけれど、此の度の喪中のお報せのお葉書に、何故かふいと、貴方はお父さまに対して存分に‘子ども’でいらしたのだったかしらって、そんなことが漠然と気掛かりとして、私の心に思い浮かびましたの。

さらにそれをきっかけにもう一つ‘自由連想’が脳裏に浮かびましたもので、それを貴方のお耳にちょっとお届けしようと思いましたの。

その昔、ロンドンでのこと。Dr.D.メルツァーとのプライベート・スーパービジョンの時間でしたが、彼がこんなことを私に漏らされたのです。自分が最高に精力的に臨床の仕事が出来たのは、研修生traineeでいた時だったって(メラニー・クラインのご存命でいらした頃かな??)・・。そしてその当時を懐かしく回顧なさって、「今はつまらない・・」といったふうな確かそんな何かしら気落ちした口ぶりでおっしゃるのでしたのね。私はオヤオヤ! ?と思いましたの。精神分析学界では既に一つの‘権威’して存在されていて、誰しもがその人を目指さんとしているというのに(即ち多くの人にとってはまさに‘親’としてあるということ)、でも意外と彼自身は、(それを誇りにしていないはずはありませんでしょうが)自分が「誰かの子ども」でいられたかつてを懐かしく追憶しておいでなわけなので

すね。ああそういうことなんだあって得心するものがありました。ですから急いで‘おとな’にならなくてもいいんだって、誰かの子どもでいられる限りは、それでもいいんだあって思いましたのね。否、むしろいつか「誰かの親」になるためにこそ、そうでなくてはならないんだって思いましたの。解るかしら？

最近しみじみと‘人の子’とは何と哀しくも物狂おしいものかと痛感しております。そして何故に人は自分を自分らしく生きられないのか、あるいは生きられるのか。それは、その人の内なる「親なるもの」の生態が厳然として関与しているといった事実を、臨床家として私は日々見据えております。精神病理の病因論並びに治療論において、この「親なるもの」の考察は不可欠であろうと考えております。「親なるもの」とは「父なるもの」「母なるもの」を包括した概念なのですが・・・人が生き難さに耐え、尚も生きられるとしたら、それは「誰かの子ども」であった自分の中に遺されてあるそして託されてある「親なるもの」を咀嚼し、そこから滋養を吸収し、それを生きる糧・指針として自分の生の中に体现化させてゆくことにしかないというふうに、私は考えます。それが、私というものの「生のかたち」なの。つまりは貴方なら貴方の、そして私なら私の「生のかたち」ということになるのだらうというふうに、私は考えております。

それでふと、貴方のごく身近においでの木村敏教授のことを思い付きましたの。私は、哲学者の西田幾多郎並びにその直弟子・西谷啓治の中に日本人の優れて‘父なるもの(親なるもの)’が感じられ、常日頃敬

愛の念を抱いておりましたが、思想的に木村敏先生はその流れを汲むお方でいらっしゃるのですし、あなたが「誰かの子ども」になれる一つの契機として、その‘誰か’のお一人になるべきところのお方ではなかろうかと考えましたの。既にそうだということなら、それは喜ばしいことに私には思えますし。まあちよつとした思い付きですのね。どうかな？

私は、既に貴方に対して個人的に立ち入ったことを伺ったり、お聞かせする立場にはもはや無いということ、重々承知しておりますのですけれども、敢えてここにお話ししてみたいという気持ちがふいと動きましたので、お便り致しました。宜しくご判読くださいますように。

ではご機嫌宜しく。 敬具
山上 千鶴子



1994年6月21日

Dr. H.A.先生
前略

いよいよ梅雨本番を迎えようとしております。うとおしくもあり、しかし同時に、雨の中にけふるがごとき紫陽花の青が眼に心懐かしくもあり、案外この季節、私は嫌いではありません。さて、先生の方もその後、ご多忙の中、お変わりなくお過ごしでいらっしゃいますでしょうか。

先日は、Miss. A.M.さん(診断名:不安神経症・33歳)をご紹介いただきまして、誠

に有り難うございました。今後こちらでの分析治療に継続してお通いいただくことになりました為、ここに一言お礼申し述べたく思いました次第です。

お問い合わせの電話での印象では、確かに症状を挙げつらうだけで、手応えの無い、さして期待も持てそうにないといった感じでしたのが、『診断面接』の段階で、徐々にじっくりと聞き込んでゆくにつれ、意外にも、生きることの酷(むご)さを味わい、かつ苦悩した人だけが語れるような言葉を時折使われまして、私、感銘を覚えました次第でして、思いがけない嬉しい出会いとなりました。『精神分析』に関連しての書物はこれ迄あれこれ読み漁っておいでとやらでして、素地は充分あったとも言えましょうが・・・。

それにしても、(先生はお気づきでしたかしら?)その電話の声からして私はつきり男性とばかり思い込んでおりました。(確かにその名前からして、男にしてはちょっと珍しいかなぐらいには思わないこともなかったのですが・・・)それが、当日現れたのが女性でしたもので、びっくり仰天しました。姿恰好も骨太ですし、顔付きからしても、まるで男性が女装してるが如き、些か奇異な感じがありまして・・・。そして、その後明らかになった事実としては、彼女に筋ジストロフィーで亡くなった2つ年上の兄なる人がいたこと、それが誰にでも好かれる性格のいい人で、両親が「お前が変われば良かった・・・」と彼女に言ったとか。本人もそれを言葉通りに納得してると無表情におっしゃるのです。だからと言いますか、つまりは否応もなし

に‘女’を捨てている、‘自分’というものを捨てているわけです。「己に何をしてしまったのか」を己自身知らない怖さ・哀しさを、彼女の中に垣間見た思いが致します。「私が私として生きること」を自らに許さない‘存在の疚しさ’に打ちひしがれているとも言えましょうかしら・・・。

「悲の器」という言葉をどこかで聞き覚えがございましたが、私は今もって、充分「悲の器」たりうるのかと内心忸怩たるものがございます。臨床家として既に、こうしたその生い立ちの中で生きることの無惨を嘗めつくした方々と出会うことは幾多ございまして、その都度、恵まれた境遇にあつて、家族の愛情と理解に包まれ、思い通りに生きている我が身を振り返り、臨床家としての器量が疑われ、安閑としていられないような焦躁に駆られることが時としてございます。自分の生が誰かの都合次第で担保にされ、生きることの出口無しの袋小路において、生の凄惨さを味わいつくす。その中で、尚それに耐え、‘愛(かな)し’という想いを心に抱くことができますかどうか・・・。それが究極には目指されておりますのかしら?そして私はその同伴者として、どこまでその愛(かな)しという想いを共有し得る自分がいるのかと日々悩みながらも、また時には嬉しくも励まされて、何とか果敢に続けられておりますような次第です。「存在の充溢」という言葉が最近とみに私の関心にありまして、この方の場合も、そうした未来を果して拓くことができますものかどうか・・・。直截的に「貴女はえらい！」と慰撫することはかないませぬものの、いつしか『わたしはわたしで良かった!』に至る道筋へと光を照らしてやるぐ

らいはできましようかしら。しばらくご一緒にお付き合ひさせていただきます所存でございます。

此の度も又、先生にこうして嬉しいご縁を取りもっていただきましたこと、深く感謝申し上げる次第です。

それでは、どうぞご機嫌宜しく。 敬具

山上 千鶴子



1994年7月4日

Prof. 小此木 啓吾先生

拝復

先日は、『至文堂』からの執筆ご依頼に付きまして、先生からご丁寧な添え状を頂戴致しまして、お心遣いをとても嬉しく、又恐縮も致しております。これ迄ですとこうした場合いつも使う「時期尚早」というお断りの言葉は、ここに至ってはいくら何でも恥ずかしいと、私ようやく観念しまして、お引き受け致しました次第です。但し、タイトルの「メルツアーの児童分析と言語論(メタファー論)」は、堅苦しいイメージですし、究極のところ彼をどう体験したのかという私を語らせていただくことでしかありませんでしょうと考えられました為、「メルツアーの児童分析理論の精髓」(仮称)と変更させていただいてよろしいでしょうか？

実のところ私の関心は長らくクライン学派ともDr.メルツアーとも疎遠でありましたが、つい最近のことDr.メルツアーの「絵画論」を改めて興味深く読み直す機会がございま

たの。それは、これ迄私が殆ど注目することのなかった画家マティスへの関心が或るひょんなことから触発されるということがあり、初めて図書館から何と欲張ってありつた4冊もの参考図録を借りてきて、堪能したというのがそもそもの契機であったわけですが…。そこには「児童画」に一脈通じる何かがあり、それも最高に洗練された結実といった印象がございまして、その折りに、かつて私がイギリスで児童臨床に携わっていた頃、同僚のDr. アン・カプランから「チズゴの子どもたちは、皆アーティストなんだねえ…」と感心されたことを、久々に懐かしくも回顧されました。更には、ロンドンから船便で送ったまま手付かずで倉庫の中で眠ったままの幾つもの段ボール箱に収まった観察なり臨床なりの記録資料(そこにはDr.メルツアーに個人指導していただいた症例も含まれております)が、俄然懐かしくも妙に気掛かりにもなっ
てまいりまして、そろそろここでそれらと出会い直すのも嬉しいかしらと、ふと思っておりましたところなのです。

ここに至って私はどうやら、ここ10年来意図的に自ら仕掛けたところの記憶喪失の時期をそろそろ脱却せんとしているらしく思われます。それは、己が己を導くに任せるといった、己の‘必然’を追求せんがための、それなりに充実した時期であったとも言えましょうから(傍目から見れば確かに少々自己閉塞的な印象があったのはやむを得ないとしても)、悔い
つもりは毛頭ありませんけれども。それにしても、ここまで忘却の淵に投げ込まれてしまっていたのかという程に、あれやこれやの過去の‘事実’が目の前に物的証拠として現われますと、まる

で本当に心底覚えのない自分に驚き、些か内心慌てふためいてしまいます。

実は、ロンドンから姉に宛てて出していた私の手紙を、彼女がこの年月保管していたということをつい去年でしたか、何かの拍子に聞かされまして、その手紙の束をごっそり手渡されましたのね。それらを読むことに苦痛を伴わないはずはありませんでして、徐々に時間を掛けてワープロに打ち付ける作業をしておりまして、同時に幾つもの嬉しい発見もございましたの。つい先日も、ロンドンで先生にお目に掛かった1975年そして1976年の頃の手紙を読みながら、本当に先生には当初よりご著書をお送りくださるなど、何かとお心遣いをいただいていたのだと思い知り、改めて感謝の念を新たにしておりましたところですよ。

この長い年月どちらさまにも不義理をしているという思いは、私の中で微かに負い目として抱えられていた風でして、それでも呆れるほどに我が儘一徹と申しますか、何とようやく今年になって大学時代なりそれ以降の恩師やら知人・友人らに帰国後初めて年賀状を差し上げたという次第でしたの。そして有り難くも多くの皆さま方から温情溢れるご返信を頂戴しまして、安堵の思いを致しましたようなことでした。そうした方々のお一人が社会心理学ご専門のProf.M.H.先生でして、ロンドン滞在の折り、一度パリに出向きました折り、お目に掛かっておりましたのですが、先生は覚えておいでじゃありませんかしら、これは確か先生に仲介の労をいただいでのご縁ではなかったか

という記憶がございますけれども…。そしてついこの間、わざわざご足労を願い、こちらでお茶の時間を一緒致しました。16年振りの再会ということになりましたが、長時間とてもいいお話し相手になってくださりまして、私にとって己自身がこの年月どういう「場」に居たのかを総括的に振り返り実感できるいい契機となりまして、なかなか貴重なるひとときでしたの。

さて、「過去との出会い直し」は、即ち‘未来の創造’という新たな標的を狙ってなくもありませんで、その点で申せば、今回頂戴いたしました先生のお手紙の中での「これからが貴女の出番」というお言葉には、とてもとても私自身としてはそうも思えませんの。先生のお立場あるいはその担われておいでの重責と、私のそれとは無論大いに違いましょし、確かに私は『精神分析』の‘不思議’に魅せられていると言いますか、まあ唯一私にとって飽きない(興味の尽きない)ことではありますものの、これ迄同様、これからも『精神分析』の制度化あるいは『精神分析家』の資格認定づけ(日本国内あるいは国際的にも)には、何ら関心を抱くことはあり得ないと思われますの。何故なら‘制度化’の功罪を問うとき、そこに私が何か関与するとしたら、出会うべくして出会ったという開かれた喜びの出会いが阻まれる恐れを感じるからです。これからも私自身自分がどういう人なのか、どういう女なのかを、驚きと感動を持って感じ入ることをしばしば可能にするところの自由が保証され、そしてそれを踏まえた上でこそその臨床家としての立場を堅持してまいりたい、と強く欲するからであります。

それに実際のところ、大概の精神科医(もしくは心理臨床士)の病院臨床の実態には、大きな壁を感じますし、私に用がある筈がないといった印象がどうしてもございます。但し、その壁を乗り越えて、敢えてお越しの方々がわずかながらもこれ迄もございませぬし、そうした私にご用のある方に限ってお相手してゆけばよろしいのだと、そのように私自身は考えております。これ迄個人開業で私が生き残れたことは‘奇跡’だったという感慨がなくもありません。現在のところ極めて恵まれたそして無理のない環境で、なかなかいい仕事ができているような気が、私自身はしております。時間的にも余裕がありますし、経済的にもそこそこ潤っております。そしてこの年月を経てこそ、クライン学派との因縁を私の中で咀嚼・賞味し得たのだという、それなりに感慨深いものが多々ございます。しかしこれから先10年、これ迄私が暖めてきた関心事から言って、もしかして異端と呼ばれる道を歩むことになるかも知れず、先生にはきっとお気に召さないことになるかも知れないという気がしなくもありませんの。

しかしながら、ロンドンから私が姉宛に綴った手紙の中に既に「今の私」がいるんですね。驚愕したというか、己を見直したというか…。ですから、どうまかり間違っても、「未来の私」は、私が‘成るべくして成った私’になることには違いはなからうと信じておりますの。それが果して如何なるものか、怖くないと言えば嘘になりますか…。

いずれにしましても、今回の『至文堂』の企画へのお誘いは、即ち先生の私への

ご厚意と受けとめております。それにお応えしたいという意味ばかりではなく、これは又私にとっても一つの節目ともなるであろう機縁として大いに活かしたい所存でおります。ここ当分の間せいぜいDr.メルツァーを始めとするかつてのロンドンでの懐かしい顔ぶれとの出会い直しに専念することと致しましょう。それが、私にとっては改めてたくさんの喜びそして慰めをもたらすであろうことを、今から十分予感しておりますの。御礼かたがた、近況をあれこれ取り留めもなく綴りましたけれども、どうぞよろしくご判読下さいますように。

それでは、いよいよ夏到来を迎え、暑さ厳しくなります折り、どうぞ御身お大事に、ご機嫌よろしくお過ごしくださいませように。

敬具

山上 千鶴子

《追伸》:御礼が大変遅れまして、申し訳ございません。いつぞやは、ペルトラン・クラールの邦訳『ママと赤ちゃんの心理療法』を頂戴致しまして、誠に有り難うございました。拝読させていただき、なるほど『精神分析』の一つの流れがこういう新規の「場」を獲得しているのかという現実に、とても感銘を覚えました。‘心を咀嚼する・味わうこと’へ向けて、人類は遅々たる歩みにしろ、何やら前進しているのかしらという希望を抱かせられる思いも致しました。更には、確かに「心の専門家」にしてみれば、こうした有益かつ簡便な知識が広く普及されることは、何をどう見ればいいのかという一つの武器・戦略を与えられることに間違いなくなりましょうから、歓迎されない筈はなからうという気も致し

ました。それにしても、人というものが、自分と生きることを運命づけられた他者を被害者に（もしくは加害者）にすることでしか、自分の‘救済’を希求し得ないという事実の怖さ・おぞましさがこれほど迄に露呈されてまいりますと、臨床家としては、人の生きることの物狂おしさに真摯に耐え、かつ冷徹に見据えるだけの豪胆さ・剛毅さが、尚いっそう問われましょう。日本人もいよいよ《甘えの構造》だけでは嵌まり切れなくなりつつあると申せましょうかしら？？なかなか面白くなったものです。

ロンドンから姉宛の私の手紙（1978年7月30日付け）の中にこんな記述がございました。《・・・そのものずばりを言えば、セラピー過程というのは、胎児の成長に似ているからして、それをみごもった者としてのセラピストの役割は、揺るぎなくも積極的に胎児（クライアント）に働きかけ、かつ又働きかけられるという切羽詰まったものを感じさせられます。この頃よく想うのは、妊娠した母体のつわりのこと、かつ又「流産」というものの実態（生理的な）。それが人間の子どもの場合には、生後母親との関係において、この切羽詰まった依存関係を続けてゆくようです。ある高名な精神分析家が胎児においても不快なフィーリングを排出しようとする動きがある（それは決して意識されていないだろうけど・・・）ように考えると（彼の精神分析の経験から）言ってもらいましたが・・・子どもを産み、育てるということは、生理的にも心理的にも当然‘つわり’は付きものでしょう。それを避けて通りたいというのは、母体が（生理的にも心理的にも）痛みを耐える能力が欠如し

ていることなのかしら？ 考えてみれば、私の持つてるクライアントの問題の起源は、そこに尽きるように思われます。皆一様に‘自家中毒症状’とも言えるわけですから・・・不快なフィーリングetc が排出する術もなく、詰まっているというような具合に・・・あなたの方も同じ？ そう言えば、傾向として最近の母親たち、実際に手や顔や懐や膝を子どもに接し与えるということが次第に希薄になっていない？ 抱っこやらおんぶの回数やらも・・・それは、私のこっちの日本人の母親たちの観察だけど。この頃、つくづく素朴な経験から想うに、人間というのは、よっぽど毒素を含むものだねえ。そして、それがうまく整理され浄化されるような浄化装置（母親の胎内、後には与えられる心の状態）に恵まれなければ、精神の発達するのは、決して促進されることはないと考えます。・・・》と、まあこんな具合なのです。

ロンドンで意気軒高に‘奮戦’していた当時の私自身の心模様が窺われ、至極懐かしいのですが、実はこの文面の続きに《・・・この頃子どもだけじゃなく、成人対象のセラピー・精神分析をも将来考えようとしています。益々解ろう・解りたいの意欲に燃えてます。・・・》という言葉が綴られておりますの。こちらの経緯は私自身すっかり忘れておりましたけど、今まさにこの「続き」を現在進行中ということになりましょうかしら？ とすれば、案外私の人生も結構辻褄が合ってるらしくもあり、又どう足掻こうと、所詮私は私以外にはなれず、自分の考えることにも己の‘限界’を越えないということでしょうかしら？！



1995年1月9日

Prof. 小此木 啓吾先生

新年明けましておめでとうございます。
先生の方は、その後お変わりなく、ご家族の皆さまお揃いで、さぞかしお正月休暇を楽しまれましたことでしょう。私の方は、東京へ戻りまして、【喜多六平太記念能楽堂】での喜多流初春会能を堪能し、ようやく今日が仕事初めでした。

さて、先生よりご推薦いただき、『至文堂』から依頼がありました例の原稿の件、まだ先生のお目に触れてはおりませんようですが、ともかくもこの数カ月間、メルツアーにじっくり付き合ってみました。「今私は、彼から何が学べるのか」。その結果が、私の原稿ということになります。拙いもので、溜息が出ましたけれども。しかしながら、帰国後殆ど忘れておりましたロンドンでの多くの事柄や出逢った子どもたち、その記憶を新たにできまして、嬉しい限りでした。そして、幾つか宿題が残りました。

その一つは、彼らにとって、自明の理というか、暗黙の了解事項というか、共通基盤となっている何か自分には見えていないという‘疎外感’は私の中に当時よりありまして、それは牙城をはるかかなたから眺めやっているような焦躁感でありました。そして今ようやくそれが見えてまいりました。意外にもそれはユダヤ思想であり、今更意外というのもおかしいと言えおかしいのですが。それも、メラニー・ク

ラインについて言えば、ラビ的な正統派ユダヤ思想の方ではなくて、どちらかと言えば、どうも民間伝承的なカバラの思想らしいという感触です。メラニー・クラインは、フロイトとは違って、何ら学問的素養のないお方で、そのナイーブさnaiveが彼女の持味であり、では精神分析家として、自分が見たものを何に依拠して概念化したのかと言え、恐らく彼女の生い立ちの中で、父母を通して聞きかじっていたユダヤ的民間伝承ではなかろうかと推察されたのです。私にとっては、フロイトもクラインも、更に申せばメルツアーも、どうもいまひとつピンと来ない人たちなのでした。彼らを愛せない自分がある、彼らに共感することを阻む何かがあるということに長い間悩んでおりました。更には、「精神分析運動」開始当初以来の内部分裂だの抗争だのといった内輪揉め、そうした今尚あちらこちらで連綿と続いている火種の元が一体何なのか、それに私自身がどのように或はどちらに加担できるのか、さっぱり分らないでおりました。むしろ関わりたくないとずうと避けて通ってきました。タヴィストックでの研修期間においても、誰一人として、精神分析をユダヤ思想との関連で云々するのを聞いた例がありません。それは、禁忌以外の何ものでもなかったわけです。だからこそ水面下で起きている葛藤・摩擦について、私はその渦中にいたにも拘わらず、当時もそしてこの長い年月‘当事者’であることが出来ないでいたということになります。そして今ここで改めてフロイトは、そしてクラインは、ユダヤ思想(あるいはユダヤ的知)をどのようにその精神分析概念構築過程において隠蔽したのか(無意識的に或は意識

的に?)が問われるべきだというふうに考えております。それが判らない以上、果して何を自分が継承してるのか、どういう思想的遺産の担い手となっているのか、私自身責任を持ってないといった恐れを深刻に感じております。

まあそんなこんなで、お正月休暇以降「カフカ」を読んでおります。何故カフカかと申せば、フロイト或はクラインの生きた時代の息吹そしてユダヤ的状况を、彼ほどに克明に描写し得た人はいないからです。なかなか面白く刺激的です。私の中で徐々に、フロイトがそしてクラインが(そしてメルツァーも)血の通った人となりつつあり、愛情すらも覚えるのです。それは、私にとってまさに安堵と申せましょう。

そこで、今回先生からお誘いがありましたセミナー講師ご依頼の件ですが、来月発行の「現代のエスプリ」の『精神分析の現在』に執筆なされた方々からさまざまなお声が聴かれるのを楽しみなことと私は思っておりますが、此の度の「小寺記念精神分析研究財団」主催の研修セミナーの企画、講師の顔触れもなかなか面白そうですね。これ迄日本の精神分析学界の状況は、率直に申せば些か野暮で退屈といった印象でしたが、最近は大変な様変わりですわね。きらびやかな意匠(衣装)をまとった有名ブランドのファッションショーを彷彿とさせます。私などは、既に‘流行遅れ’の部類に入るのはないかと、少々気後れすら覚えます。これ迄私は自分のことで手一杯で、他の方々がおやりのことにはほとんど興味がありませんでしたけれども、最近では人の話を

聞くのもいいではないかというふうに気持ちが動いております。この際ぜひこの企画受講させていただく所存です。当分はおとなしく傾聴させていただきますまいと思っております。そして、人さまのお話を聞かせていただくのですから、私も、実際人前でお話することは不慣れで、果して大丈夫なのか些か心もとなくはございますが、まあ今こんなことを考えてる程度の話なら出来るかとも思われますので、よろしければお引き受けさせていただきたく思います。

演題につきましては、与えられたものはピンと来ません。むしろ「メルツァーを語る—ユダヤ人性と日本人性の弁証法的展開について」といったところになりましょう。この演題は、まあ野心的すぎると言いますか、我ながらそれ恐ろしくも感じられはしますけれども…。あれやこれやと分からないことだらけで、今しばらく時間をいただくと有り難いのです。従って、もしお引き受けするとしましても、皆様の一番後ということで、来春にというふうに考えております。よろしくお取り計らいいただきますように、お願い申し上げます。

今年はややくにして、先生にお目に掛かれることになりそうですよ、とても楽しみに致しております。それでは、ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1995年6月5日

Mr. H.S.先生

お久しぶりでございます。貴方は異国の地でお変わりもなく、存分にお励みで

いらっしゃいますかしら？いろいろな筋から貴方のロンドンでのご健闘ぶりを伺っておりまして、いつぞや渡英なさる前の貴方に私がく英国行きは結局のところ自分を見つけにゆくことだと申し上げたこと、貴方は憶えておいでかしらって考えることがございます。だいふ貴方のタビストック・クリニックでの在籍期間がここずうと伸び延びになっておいでのご様子、何かしら見なくてはならないと思われるものをそこで見つけたということなら、とても結構に思われますが、如何がでしょうか？

さて、いつぞや貴方にお届けすることをお約束しておりました「現代のエスプリー精神分析の現在」が予定より大幅に遅れまして、ようやく出まして、貴方に書籍小包でお送りしました。私の拙い文章が載っております。どうぞお目を通してくださいませ。

実は私は、帰国後ずうとクライニアンであることの自覚も乏しく、メルツアーをも忘れかけておりましたものですから、それに《日本精神分析学会》とも疎遠でして、つまり有り難いことにこれ迄放って置かれたままでしたわけで、それが今になってこのような執筆依頼を受けまして、自分は一体メルツアーについて何を知っていると云えるのかと、俄然慌てましたのね。「タビストック」にいらしたことのおありのDr.K.T.先生に問い合わせましたら、‘知らぬが仏’の私なぞが読んでもない近年の彼の著書がごっそりあって、更に慌てふためきましたの。まあしかし気を取り直し、この際どこまで彼から何が学べるかじっくり付き合ってみる気になりました

た結果がこれなわけです。

実はと申せば、私自身今回この本のページをあちこちめぐりながら、内心複雑な心境なのです。勿論小此木啓吾先生は得意満面なのですが、私としては、ああ、こんな風に日本に『精神分析』が導入されるのはどうしようもないなと頭を抱えてしまうのです。私がそこに是非とも探し求めたかったことは、それぞれが自分故の何か必然があって誰かと出逢い、そしてその相手を相手しながら、自分の中から必死になって言葉を紡ぎだそうとする真摯な態度です。そうした‘切り結ぶ’姿勢、即ち‘主体’がどうしてこうも希薄なのか、曖昧なのか、そのお粗末さ加減には途方に暮れます。かく言う私にしてもしかりでして、そろそろ私も遅ればせながら「声」を持つとの覚悟をようやく固めつつあります。語るべきものがあり、それを聞かせたい人がいるということが、恐らく幸福というものなのでしょうから…。

さて、勿論私の帰国当時(1979年頃)のメルツアーの関心と言えば既にピオンをフォローしていたのは解っておりましたが、私はそうした彼の動きを当時から懐疑的に見ていましたから、今回彼の1980年代の著書を読みまして、やはり些か面白くないものを感じたりしました。いつぞや私の直属の上司であったMr.ジョン・ブレンナーが私への手紙のなかで、Dr.ピオンを今世紀最大の‘哲学者’の一人と称賛しておられて、あれっ、哲学が破綻したところにこそ『精神分析』があるのにと一抹の違和感を覚えた記憶があります。確かに非論理性に徹底して論理を持ち込んだというところ

が恐らく大変に野心的ではあるのでしょうし、彼らの熱狂ぶりが分からなくもありませんが、それを懐疑的に眺める気分が当初から私の中にはあったのです、何故とも言えぬままに…。それは、彼の思想体系が如何なる感情母胎(emotional matrix)から派生するものなのかという点が曖昧にしか伝わらないという点です。私は彼が語った事柄にではなくて、ついに語らなかつたものが何だったのかについて関心があります。つまり彼は何を見て、何にこだわった人なのかというのがどうしても漠としてよく分かった気が致しません。確かなことは、精神分析学界に巣くう‘これでいい・ここでいい(安定そして膠着化)’を突き崩すべく懐疑を絶えず持ち込んだという点であり、恐らくそれが彼の真骨頂であつたろうという印象はありますが…。で、それはそれでよく分かるとして、しかしだからこそ、それが何故に英国人にあのようにスナナリと偶像崇拜的な熱狂をもたらしたのか、どうも腑に落ちないのです。確かに彼の語る言葉には小気味のいいものがあります。それに諸手をあげて大賛成とばかりに同調するのは、たぶん英国人の先鋭的radicalであろうとする知的エリート意識をくすぐるであろうと考えられます。でもそれは、自分という‘主体’の突き崩し(改革)に触れない限りにおいてであり、どこかに巧妙な合理化(知性化)があるのではないかという勘ぐりが、私にはあります。何故ならば、人は「これでいい・ここでいい(安定・秩序)」を本来志向しているものであり、それを志向する(或は逆行する)四苦八苦の過程における痛みこそが、自己同一性(或は‘主体’)の根幹にあると考えられるからです。そこらはそう簡単に否定さ

れ突き崩されるわけにはゆかないでしょう。特に自分の顔を持たない・自分の声を持たない(つまり自己同一性の脆弱なる)日本人にとっては尚更にです。これが私の実感です。

ビオンの臨床経験において遭遇した患者たちは、「わたしがわたしになる以前の状態、もしくはわたしがわたしであることを止めた、或は超えた状態」にあつたということなのでしょう。ここらが私にとって限界になりますが、私が臨床家としてこだわるのは、患者一人一人が自分という物語を語れること、そして生きられることを、聴くことを通して支持できるかどうかということにあります。人とは愚かしくも己に背きながら、己に立ち還ることしかできないもの。「自分が自分である」というのが幻想であり、その突き崩しが意図されるとしたら、それじゃあ、わたしはわたしの責任において一体‘誰’を生きたいのか、精神分析家は答えなくてはならないでしょう。そんなことができるはずもないと、私は想う。

そこら辺りに、ビオンの自家撞着があり、自分が理解されるということに徹底して懐疑的であつた所以でもあり、だから祖国の熱狂的なラブコールに背を向け、やがてはついに帰国したものの、やれ嬉しやと小躍りする彼らに永久的な肩透かしをして裏切つたのだと、私は勘ぐってしまう。このミス・マッチの感覚(決して出会えない！決して分かり得ない！)は、遡ればビオンの生い立ちの中にある彼の核なるものと思われるのですが…。それが彼の‘不幸’というか、むしろ彼の熱烈な信奉者である英国人らにとっての不幸でもあつたろうと思わ

れます。彼の分析を受けた人で彼を悪くなど言う人はいない。誰もが口をきわめて褒めそやす。だけど彼は決して自分が分かれたとは思えないわけで…。そこに、臨床の場が人間的な「分かる一分かられる」関わりであるという本来性を止めてしまったような、不幸というか、不健康な、もっと言えば不実を私は嗅いでしまう。或意味、彼はご自分を‘高級な片輪’とすら思っていた節はないかしら？

「タビストック・センター」のレクチャールームでの講演の際に、聴衆の醸し出す熱気とは裏腹に彼の姿に癒しがたい孤絶と寂寥の影が感じられた。最前列に陣取っていた友人のエリザベス・カートライトなんぞは、ビオンが押し黙ってなかなか口を開こうとしないものだから大いに焦れて、しょうこと無しに彼の肖像をスケッチしてたんだって言うの。その1枚を彼女から貰ってある。どうも‘食えない御仁’だという印象がやはり残った。おそらくは生涯をとおして「率直であること」に憧れ、「無邪気さ」に恋こがれ、しかしながらどこまでもそれとは程遠い己自身が恨めしいといった、挫かれ懊悩する魂を想う。もしやこれって英国人特有のエスプリなんですかしらね。このペーソス(哀感)故にビオンは愛されたとと言えるのかも…。こうした私の直観がもしも正しければ、メルツァーの健全さ、つまりは出会うことに分かり合うことに勇猛果敢であり、楽観的であろうとする彼が、周囲と齟齬をきたしたというのも逆説的ながら‘自然の理’と、私に



は受け止められるのです。如何がかしら？

さてさて、私は『精神分析』の全貌を掌握してるわけでもありませんし、それがこれからどこへ向かおうとしているのかの予測も難しいと思っておりますが、そもそも『国際精神分析学会』創立立案に当たり、フロイトへの手紙(1910/2/5付)の中で、フェレンツェが「精神分析の前途は、民主的な平等化に通ずるものではない。むしろ哲学者の考えるプラトニズムに沿った選民となるに違いない」と語っていて、フロイトはその3日後に、自分が既に同じ考えをもっていたと答えたとか。ビオンという人は恐らく、そうした精神分析運動の一般原理を具現化した象徴として祭り上げられる運命を存命中に担わさせられていて、それに彼が如何に逆らおうとも、それは確定であり、特にその死後は尚更によりいっそう確固たるものになってゆくという印象があります。そして想像をたくましくするならば、恐らく精神分析家にとっての来るべき21世紀とは、ビオンを咀嚼することに明け暮れることになるでしょう。そうした避けられない趨勢に、どうしても軽々しく同調したくないと私が改めてここでこだわるのは、一つの忘れ難い記憶のせいなのです。

或るときフランス人で産婦人科医のDr.フレデリック・ルボワイエが招聘され、「タビストック」で講演なさったの。彼は、『暴力なき出産』の提唱者であるんだそうです。(彼のこの著書は、日本では中川吉晴訳で『星雲社』から出版されております。)その折り彼が持参し上映されたフィルムがある。《Loving Hands》

というタイトルで、インドの或る村落で、昼下りに日差しを避けて戸外で、母親が赤子を自分の膝と脚の上に乗せて、オイル・マッサージをしている、そんな風景が映されておりました。フギャフギャとからだを強張らせて散漫な動きをしていた赤子が、徐々に母親の柔らかいリズムカルなウウ〜ンウウーの鼻歌に呼応するように、緊張がほぐされ穏やかな表情を深めてゆきました。私は、それを見ながら昔幼少時に自分がよく頭が痛いと言っては母親に額を撫でてもらった記憶が蘇り、どんなにかsoothing(心地いい)であったことか。《Loving Hands(愛撫する手)》をそのままスナリ受け入れたわけです。ところが、その講演と映画の後で、幾人かと一緒にセミナー・ルームに戻りまして、席に着いたら私は真っ先に素晴らしかったと興奮を漏らすつもりでいたんです。それが確かMrs.Shirly Hoxterでしたか、<よくもあんなものを持ってきたもんだ！>と吐き捨てるように、Dr.ルボワイエについて悪態を付き出したんですよ。それから居並ぶ人たちの口から次々と飛び出す反撥・拒絶(生理的なアレルギー反応！)に私は驚愕し、気が動転してしまったのです。私にはsoothing(心地いい)と受け取れた母子間の身体(皮膚)接触が、なんと彼らには‘子どもへの暴力’として映ったわけですから。かつての属領地インドへの蔑視ゆえかとも一瞬訝しくも思い、さらには彼らを一様に‘不感症’と断罪するのは簡単ながら、問題はそれほど単純でもなく、おそらく根は深いと直観し、私は押し黙るしかなかった。が、その場で彼等に抱いた隔絶感ばかりではなく、むしろ「自分がとんでもない場違いな所に居る」とい

った、かつて覚えの無いほどの居たたまれない疎外感に衝撃を受け、心底打ちのめされたのです。この時のボディ・ブローの執拗な痛みは、記憶として私のからだのどこかに、帰国後の今尚も、まだ抜けきれずに疼いているものと思われてなりません。

それ以来、私の中で西洋人というものについて、或は西欧文明についての批判(懐疑)をずうっと引きずってきたと言えましょう。煎じつめれば、それは「からだ(身体性)」の無視(もしくは肉体への嫌悪感)の事実です。そしてそれは、近代的自我の探求つまり自意識の覚醒のために支払われた代償であると、私は考えております。つねに冷静たんとする頭脳が、己自身の精神と肉体を結ぶすべての絆を断ち切ってしまう。そして恐らく肉体に結びつくものは、自分には無縁なものと思ってしまうということではないかしら。これは実に惨いことです。本当に救われがたい、痛ましいことです。

つい最近のことですが、友人の薦めで「アリス・ミラー」の著書を幾つか読みました。『禁じられた知』『魂の殺人』(山下広子訳【新曜社】)ですが、貴方は既にご存じでしたか？からだの感覚の疎外、その深刻さの裏返しの形が、まさに彼女がその著書で告発している近親姦の幼児性虐待のおぞましい実態であり、さらにはポルノグラフィーに窺われる女性に対する性的搾取であると考えられるのです。「アリス・ミラー」という人はすでにあちらでは‘政治的存在’と言われているようですが、それは精神分析内部批判に止まらず、何千年

にも亘って營々と築いてきた西欧文明を根幹から糾弾するものでありましょう。

ところで、貴方のお耳には届いていきますかしら、日本で騒がれている幾多の社会問題。例えば、子どものいじめと自殺問題、それと「オウム真理教」関連の事件。私は、それらは究極には西欧人と同様、現代の日本人においても「からだの感覚の疎外」が深刻化している一つの現象として理解しております。それはいっそう加速化してゆくでしょう。それに『精神分析』は今後どう対応してゆくか、その生き残りが問われてゆくはずです。私は全然樂觀などしておりません。

面白いことに、巷では逸早くビジネス・チャンスとしてそれへの対応の動きが出ております。「心のケア」というのも今流行語ですし、カウンセリングの類は百花繚乱です。貴方は、「ヒーリングサウンド」とか「ヒーリングアート」とかご存じでしたか？「サウンドLSD」とかいうちょっぴりいかがわしいものもあります。先日ミュージック・ショップでそうした種類のCDを見つけまして、なるほどと感心しました。試みに幾つか買い求めましたが、題名は、「月光浴」「オーロラの音楽」「Silent Joy」と言った具合……。要するに、からだに気持ちいいというのが狙いなわけです。一番の傑作は「Cosmic Dolphin」というCDです。イルカ達とコミュニケーションするというのが結構今の流行りなんです。その中で動物の鳴き声に混じって、それに呼応するかのように赤子の笑い声が聞こえてくるのね。まさに母親にあやされて喜んでい

るといった風で……。キャキャとかウウウとかフギヤフギヤとか、思わず知らず釣られてこちらも笑ってしまうのです。それは、フレデリック・ルボワイエの著書の中に掲載されてあった写真、眠りに憩う赤ちゃんの自然に湧き出た笑顔、本当に気持ちいい！といった気分そのもの。それを連想させたんだけど……。昨今しみじみと「人生は何故にかくも残酷でなければならないのか。そんな理由などないはずなのに」と思ってしまう。何故にやさしくし合うことがこんなにも難しくなっているのかと悲しく情けなく想うとき、「あなたは誰のためなら泣けますか」という問い掛けが、ふと私の中に浮かんできたのね。この人のためなら泣けるという誰かを持たない不幸、そんな若者が増えているということじゃないかという気がしてる。悼む(痛む)心を育てられない、この国の貧しさとは何か。ああ、闘わなくてはと心を奮い立たせるのです。

それでね、最近すごく気になっていることは、S. フェレンツエの存在です。私はタビストック滞在中、フェレンツエの名前を聞いた覚えがありません。その彼の直弟子とされるマイクル・パリントの存在についても、身近にいたはずなのに、まるで聞かされたこともなく無知でしたのね。それが今回メルツアーを読み直しての感想ですが、メラニー・クラインの系譜ということは、とりも直さずフェレンツエに遡るとのこと。メルツアーの健全さと私が申し上げたのは、実はそのことでしたの。恐らくそれはメルツアーの意図にはないのかも知れません。しかしピオンとは一線を画する流れがあるとすれば、即ちフェレンツエの‘復権’へと繋がる動きでは

ないかと、私は考えてます。それは、子どもの外界の認識とはまずは世界を身体感覚で把握するといった彼の corporeality の概念、それを基点とした symbolic activities の解明です。私は、残念ながらフェレンツェのものを直接眼にする機会がありません。クラインあるいはバリントの翻訳物からの抜粋に限りますが、これからその筋でクラインあるいはメルツァーを読み直ししてみたいと考えております。ピオンが席捲する英国では、今後もフェレンツェの‘名誉回復’は期待できるとは毛頭思いませんけれども、しかしながら世界は明らかに「からだの感覚の取り戻し」を急務としてるように思われます。それは取りも直さず『世界観』の見直しが必至となりましょう。

最近、私もようやく精神分析をお勉強しようと思ひまして、小此木先生主催の『精神分析セミナー』に出席しておりますが、そこでまさに「精神分析の現在」に遭遇しております、世界中(!)の様々な人の様々な理論の中に、そうした「からだの感覚」を取り込む兆しがようやく出てきているのに驚き、これはもしやしてかつて精神分析のサークルから締め出され黙殺されて、今なお汚名を着せられ葬り去られたままのフェレンツェの‘復権’なのではなかろうかと内心思ってしまったものですから。

いずれまたいつか貴方が私にお話したいようなことがございましたら、どうぞご遠慮なくお手紙くださいね。「タビストック・ファミリー」という言葉を聞いた覚えございましたでしょ？それはタビストックに在籍したことのある者は、

互いに何かしらご縁に列なっているという意味でしょうから、私は貴方の現在そして帰国後の貴方らしさの自己展開にそれ相応の関心を抱いているということをごにお伝えしておきましょう。どうぞお元気で、お励みくださいますように。ご機嫌よろしく。 山上 千鶴子



1995年11月7日

Mrs. W.R.先生

ご丁寧なるお便り頂戴いたしましてとても嬉しゅうございました。どうも有難う。

先日、講師としてお招きいただきましての『東海・中部精神分析セミナー』では、貴女のまさに‘取って置き’とも言える貴重な症例をご提出いただき、それだけでも相当に勇気あることと感じ入っておりました。又、その後での懇親会にもお残りいただきまして、幾つか言葉を交える中で、貴女という方が臨床家としてなかなかの‘勁さ’をお持ちなのを、とても頼もしく印象に残っておりましたのね。

更に、今回頂戴いたしました貴女のお手紙からも、いろいろご自分の中でセミナー当日に味わられました‘違和感’をじっくり見据えられたお心の経緯がとてもよく伝わりまして、貴女のその勁さにまたまた感銘いたしました。そうして‘相容れないもの’との葛藤を経て、自分が見えてくるということが多々ありましょう。それでいいのです。答えは一つしか無いということは無いのですから……。

ただ後でふと面白いと思われましたことですが、これ迄気づかずにおりましたけれども、心理臨床にもやはり「地方色」というものがあるんだろうなということに思い至ったのです。よそ者である私がそれら微妙な‘綾’を読み取ること、もしくは読み取ったそれらを皆さんに伝え分かち合うことの難しさを改めて感じました。(貴女も、もしかして「三河の女」なのかしら?! 貴女の‘勁さ’から、ふと豊臣秀吉の妻女・ねねが連想されましたけれど、違ったかしら??)

さて、それはともかくとして、臨床の場で目の前にしている小さな男の子、それを相手しているつもりでも、よくよく見れば相手してるものがとんでもない代物、つまりその土地に何代にも亙って連綿と息づく精神構造の「血統・血脈」なのじゃないかという気がふいに致しました。真に貴女が臨床の場で相手にしているものの途方もない‘闇’の深さ・頑迷さに圧倒される思いでした。思わず私が口走った「日本の児童臨床の‘限界’」、そして貴女という「児童臨床家の‘限界’」ということは、実はそうした視点に絡ませたの発言だったわけなのです。それは一言で言えば、おそらくは「無明」いう言葉になるのでしょうかけれども…。

貴女のセラピイ患者S君(主訴:不登校)の周りに、何かしら幾重にも見えない‘縄’を感じたのです。そして彼はその‘縄’の呪縛に抗いながらも、むしろ徐々に囲い込まれそして飼い慣らされる恰好で安住し、やがてはその‘縄’の担い手になって生きることを選ばん

としてゆくといったような…、私にはそのような彼の未来しか思い描けなかったのです。人はそれを宿命と呼ぶかも知れない。それに抗って、彼が‘己の生’を選べるなどという自由が果たして求められていますものかどうか、ご家族に? 彼自身に? いかがでしょうか? かなり懐疑的といえましょう。さらには、彼を取り巻く‘飼い馴らしの包囲網’は、S君に関わり合う児童臨床家、つまり貴女をも取り込もうとしないわけもなく、おそらく無難なところではそうした飼い馴らしtaming に同調し、加担せざるを得ない羽目になりましょう。もしもセラピストのスタンスとして、それに違和感を覚え、まあクライニアンならばそうでしょうけれども、例えば「S君、あなたの生はあなたものなのよ!」と呼び掛けるスタンスを貴女が堅持なさろうとしますならば、それはとんでもない熾烈な‘闘争’を覚悟するしかない。つまりその‘縄’なるものを、いのちを侵すものとして、敢然として撃つことでしょうか。オソロシイ! それを私はセミナーの会場でコメンテーターの権限において貴女に語ることに腰が引けてしまったんだと言わざるを得ません。無理と思うところで引っ込めてしまう、その不徹底さを内心恨みとしながらも、しかしながら私が貴女に付き合える、そして付き合わせていいと思われる限界を踏まえてでしかお話できない以上、それもやむを得ないと考えた次第です。ご免なさいね。

確かに、私にしても貴女のS君がどいう青年として、さらにはどういとおとなの男として成長してゆくのか、果たして‘己の生’を選んでゆけるものなのか至極気掛かりですし、彼

の未来を知れるものなら是非にも知りたいもの
と思われます。

しかしおそらくは、彼の行く末を見
届けるまでもなく、もしかしてそれがそうである
やも知れないところの多様な選択肢のかたち
が生きざまとしてさまざまに結実しているのを貴
女の身近の誰彼の中に案外簡単に見出すこ
とはお出来になりませんか？ 成人を対象と
した心理臨床において、もしくは実生活におい
ても・・・面白いことに、俄然私、思い当たりま
したの。私のかなり以前の交友関係の中に一
人いたのです、三河出身者が！そして貴女の
S君から、今回教えられましたことは、その私
のかつての友人である彼、なかなか気骨のあ
る御仁でして、よく『田中正造』の話が聞か
されたり致しましたが、彼の信条とは「飼ひ馴ら
されてたまるか！」という一言に尽きましよう。お
そらくはどこかしら出発点はS君と似たり寄つた
りの境遇であったのでしょう、しかしそこから今
彼はどのぐらい隔たったところに在るかを理解し
ますとき、今も尚彼はどこにいても‘縄’の呪縛
に抗い、‘縄の担い手’になることを潔しとせず
して生きねばならないわけが、つまり彼の人生
が或る種「無明との闘い」であることの意味が、
そうであるがゆえの彼の辛さが、彼の憤りが、そ
して彼の涙が、何やらようやく理解できたような
気が致しましたの。ほおー、なるほど！といった
思いでした。

こうして心理臨床を通して、私達は、
自分の中に様々な気づきが生まれる、つまり
「わたしではないもの」が「わたし」になってゆく
契機を孕んでいる、そうした出逢いに恵まれて

おりますことを、大いなる喜びとしたいと想うの
です。どうぞ益々お励みくださいますように。

ご機嫌よう。

山上 千鶴子



1996年2月8日

Mrs. G.Y.さま

前略

お懐かしゅうございます。アメリカから
お手紙が届きまして、あらまあ！と、嬉しい驚
きでした。どうも有り難う。お元気でお励みでし
たのね。貴女の躍動した気分が文面に溢れ
伝わってまいりまして、大変に悦ばしく、そして
頼もしく拝読致しました。

こちらでしばらく分析セッションにお
通いいただきましてからかなりの歳月が経ちま
したけれども、ご主人ともどもご無事にアメリカ
に帰国されておいででしたのね。良かったこ
と！貴女が彼の地で本格的に「心理学」の
勉強をお始めになられた由、嬉しく興味深く
伺いました。貴女の意気軒昂さを大いに祝福
致したく思われます。

さてこれからアメリカという国が、貴
女にどのようなチャンスそして出逢いを提供し
てくれるのか、本当に楽しみなことです。私は、
大いに期待しておりますよ。

実は最近、これは凄い！というアメ
リカ人を見つけましたの。ジョーゼフ・キャンベル
(Joseph Campbell)とって、比較神話学の

世界的権威だそうです。ジョーゼフ・キャンベルとビル・モイヤーズ(Bill Moyers)の対談、題して『神話の力』(The Power of Myth)というのがここしばらくNHKで6回シリーズで放映されておりまして、それはそれは感銘深いものがありました。そこにはアメリカという国の素晴らしいものが濃密に凝縮されているような印象を受けましたの。

どうぞPowerful かつ Beautiful なアメリカ人たちを、たんと見つけられますように。そしていいものが見つかったならば、是が非でもそれに食らいついて離れないことだと、私は思います。そしてそれらに自らが列なることをはっきり意志することです。それは、生きることに耐えられると信じられる何かになる筈だからです。そして又たぶん、あなたのご両親が生きられなかった生をあなたが代わって生きることもなりましよう。それでこそ生命(いのち)を受け継いだ意味があろうというものです。そしていつの日か、自分の生命(いのち)を誰かに引き継がせることで、自らが自信と至福に充たされるであろう未来を、希望をもって待つことです。

それでは、どうぞご機嫌よろしく

敬具

山上 千鶴子



1996年3月11日

Prof. 小此木 啓吾先生

ようやく気候も春めいてまいりまして、嬉しい季節を迎えようとしております。日頃

ご無沙汰致しておりますが、先生の方もお変わりございませんようで、ご多忙のご様子など、時折私の耳にも届いておりまして、お慶び申し上げます。

つい先日の《蒐集家としてのフロイト展》(於:【古美術 三日月】)はなかなか楽しい企画でしたわね。先生のご講演はすでに予約で満席とかで、私は当日拝聴できませんでして、とても残念でした。

後日訪れました際、フロイトの骨董趣味にはさしたる興味も覚えませんが、むしろ展示場の片隅に設けられてありましたフロイト紹介のビデオ映像に眼が奪われました。セピア色の古き良き都ウィーンの情景やら、ウィーン人として誇り高くお暮らしぶりの窺われるフロイトの家族写真やらも結構盛りだくさんで……。なかなか編集がとてもうまくできてましたわね。私、あれは初めて拝見しました。Miss.アンナ・フロイトのお顔が画面いっぱい映し出されました時には、あら、なんて懐かしい…！って、ロンドンで先生とご一緒に彼女に面会しました当時の思い出があれこれ蘇ってまいりました。もう随分と昔になりますわね。

Miss.アンナ・フロイトの棗のように小さく萎びた可愛いお顔、でもまだその両眼には光があったのはさすがだと一瞬感銘を覚えたのを記憶しております。ただ、居間に通されて、椅子に腰掛けられた彼女が開口一番、「What can I help you?」(ご用件を伺いましょう?)とおっしゃって、あらまあ、遠方から遥々お越しの方にそんな言い方するかなあと

一瞬違和感を覚え、私はなんとも白けてしま
って…。先生は、「表敬訪問だから…」と後で
おっしゃっておいででしたが、確かにその域を出
ませんでしたわねえ。

日本からのお土産ものとして先生が
彼女にお手渡しされました桐箱入りの【染付
けの鉢】にはお喜びでしたわね。私も、久々に
見た染付けの青の色が妙に懐かしく、一瞬魅
了された記憶がございますの。事前に私の勤
務先のSt.George's Hospitalに、彼女の方
から電話があり、面会日についてやり取りがご
ざいましたんですが、取り次いだ秘書のジェー
ンなどは、「チズコにMiss.アンナ・フロイトから電
話があった！」って大騒ぎしてたのが今では懐
かしい。確かに、それは大したことだったんです
わね。私自身はどうせ小此木先生の通訳とし
てご同行するだけだと冷めてまして、もっともそ
れも彼女の妙にアクセントの強い、私には耳
慣れない英語を日本語に訳するのに難儀し
て、自分としても拙い通訳しかできませんこと
に焦れ、更に気分は白けたというのが本音のと
ころ。

実は私の学生時代、彼女の著書・
論文をよく読み漁ってまして、随分と啓蒙され
てましたわけですし、それでいずれ近い将来に
はHampstead Clinicへ留学をと発奮しま
して、そういえば研修コースの資料パンフなども
取り寄せてましたんですの。それがいつしかそ
ちらではなく、道路隔てたこちら Tavistock
Clinicの方にご縁が繋がったという、ことの顛
末なのでしたわけで…。ともかく彼女には恩義
がありますからして、もっと打ち解けて深謝いた

すべきでしたでしょうに。黒衣に徹して、要らぬ
遠慮をしてしまったことがむしろ悔やまれてなり
ません。

とにかく‘謁見’は和やかに過ぎて、
彼女は終始ごく無邪気に機嫌良く振舞われ
て、私たちを居間兼面接室のあちこちにご案
内くださいましたわね。Professor.フロイトが



使用された分析
患者用のカウチ
(寝椅子)やら彼の
直筆なるところの
丹精な原稿なども

有難く拝見させていただきましたわけで。どん
なにかお父さまがご自慢でいらしたのか、Miss.
アンナ・フロイトの誇らしいお気持ちが伝わっ
てまいりました。ご自身にしてもさぞかしお父上の
‘秘蔵っ子’（「the apple of Daddy's eye」）たらんとご苦勞なされ、少なからず辛酸を
舐められた生涯でいらしたのだろうと推察され
ました。ただ、お部屋の中をきょろきょろ眺め入
るのは不謹慎かと控えてましたもので、記憶も
判然とは致しませんが、おそらくフロイトの蒐集
された古美術・骨董の類もあちこちに並べられ
てありましたのでしょう。歴史遺物に埋もれた、
埃っぽい博物館のような空気が漂い、そこにこ
ぢんまりと収まっていらしたMiss.アンナ・フロイト
のお姿は、恰も‘墓守り娘’を髣髴とさせられ
て、なにやらおいたわしい感は否めませんでした
けれども…。今でもまだまだ患者さんは診て
らっしゃると伺い、その気魄には胸打たれました。
御年80歳を超えられて、尚も彼女にとって隠
退というのはあり得ないということかなって…。

実はあの後しばらくして、表敬訪問



ということならば
花束ぐらいはお
持ちすべきで、と
んだ無調法した
と恥じ入りまして、

早速に近くの花屋さんからMiss. アンナ・フロイト宅に花束をお届けして貰いましたの。《Dr. Keigo Okonogi from Japan》のカードを添えて…。このお話、先生に致してませんでしたかしら？まるで総てが遙か遠い夢のような…。ほんとに夢だったのかも知れませんか！？

さて、現実にお話を戻しますと、お約束の『精神分析研究セミナー』でお話する私の順番がついにまいりましたようです。ここに参考臨床資料を同封致しました。これは「診断面接」でも、際立って単純明快な方の部類です。これをひとつの‘叩き台’にして、《精神分析の言語とは何か》をテーマに、「メルツァーを語る——ユダヤ的知を巡って」との関連づけで、幾らかお話しができるかと思われましたので…。一応、この資料を当日読みあげるつもりでありますが、もしよろしければご参加の皆さんにコピーを配布して下さっても結構でございますので…。

それでは3月16日(夕刻 6時半)、会場にてお目に掛かります。何かと不慣れでございますので、どうぞ宜しく願い申し上げます。では、ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子

.....



1996年3月18日

Prof. 小此木 啓吾先生

お彼岸の花々が花屋の店頭であまりも華やぎに溢れておりましたものですからどっさり買い求めまして、ガラス器に盛りました。この贅沢な時間、私は今独り、華やかな春の訪れを楽しんでおります。そう言えば、買いものがたら立ち寄った近くの高森神社の境内では、既に桜の木が蕾を膨らませておりましたんですよ。嬉しい驚きでした。

さて、先日は久々にご一緒できてまして、本当に嬉しゅうございました。日頃のご無沙汰のお詫びにいくらかなりともなりましたかどうか…。私としましては、随分長い間、帰国前から先生には過分にもお心に掛けていただきましたのに、全然まともにお応えていないという不義理の心苦しさを内心抱えておりましたような気が致します。それがようやく10年余りも経て、此の度些かなりともお応えできましたことで、一応の安堵をしておりますような次第です。

やはり英国での異文化体験は私の中で十分に咀嚼し切れない恨みがありましたのでしよう。自分の個人的な体験談を皆さんの前で露にすることは、どうもはしたないと思われましたし、「精神分析」とはいいものなのだとその‘樂觀’を皆さま方にお伝えでき、希望が語れるまでは自分を出てゆけないのだと一途に思い込んでいた節がございます。あちらで教えられたことは忘れてしまって、それでも何

かが自分の中に残れば、それで私は生きてゆけばいいのだという達観と、まあ、それで生きてゆけなくもなかろうという途方もない楽観も、実はございましたし…。

こういった何と言いますか、欲がないと言うか、捨身なところが私の持味なのだという気もしております。それが傍から見れば、災いしてなくもないということになるかも知れませんが、でも自分が精神分析家であることで、これ迄にもまさに勿体ないほどの恩寵・恩恵をいただいてきたという思いがございますし、それは今もなお現在進行形なので、出会えてよかったと思える人達に巡りあうために、私はこれからも精神分析家であり続けるだろうという気持ちがございますし、それで十分なのです。敢えて‘有名人’になる必要はありませんので…それはむしろ自分が不自由になることだから遠慮したいといった忌避感がどうも私の中に強くございましたの。

しかしながら、そうした私らしい‘自己本位さ’というのはそれはそれで結構とは言いながらも、それに先日も申し述べましたように「群れることに羞恥心を覚える」自分がありますのは本当ですけれども、やはりこの国の未来を憂慮します時、（立場なり専門なり年齢・性別を問わず）目覚めてゆこうとする人達との共同戦線を張ることの必要性を、昨今頓に強く抱くようになっておりますし、精神分析家として、私もまたこの日本での精神分析の行く末に責任があるという風に、自分を無理にでもそのように考えるように今後仕向けてゆ

かねばならないと徐々に思い始めておりましたような次第です。

かつてMiss.アンナ・フロイトから直々に頂戴したメッセージにしても、確かに精神分析の未来を日本にこそ期待している>とやらでしたが。それに、私のタビストック在籍中にも、日本の貢献が望まれているとやら大いに励まされることもありましたが…。それを伺えば、とても面映ゆい気分だという以上に、我々は一体彼らから何を託されているんでしょうかしらと煩悶いたします。煽られて旗を振りかざすのも剣呑ですし、此の地で誰にも頼まれもしない、要らぬお世話をする羽目になるのもよろしい筈ありませんから。この場合はやはり、『脚下照顧』との禅家の標語にありますとおりじゃありませんかしら？ 私としてはなかなか身動きがままなりませんわけなのでして…。

小此木先生がこの業界でプロモーターのお立ち場なのは承知致しております、今の日本で「精神分析集団」なるものは、そうした先生のご尽力があって初めて成り立っていることは理解しております。『日本精神分析協会』の試み、研修制度なり資格認定づけなりもそうしたご努力の一環として承知しております。先生がおやりにならなくてはならないとお思いのことはおやりにならなくてはなりませんでしょう。ただ今回初めてセミナーにどういふ方々がお集まりなのかをぼんやりと見渡してみましてね、やはり皆さん‘優等生’なのですなあ。実にそつが無く、要領良く、与えられたものを従順にみごとにこなしていらっしゃる（受験勉強と同じ感覚?!）。このおとなしさが無気味と申しますか、なにやら

‘嘘臭い’と申しますか、どうも私には引っ掛かるのです。このままでゆけば、精神分析は‘お勉強’の域を出ないものになりませんか？

私としましては、研修制度やら資格取得とは無縁なところに身を置いてまいります。何ほどの将来の保証がなくても、毎回のセッションの中で応答し合う人間同士に切り結ばれる一瞬があり、そして当人の思惑を超えて予想外の言葉が漏れ聞こえる、そうした‘協同的交わり’ communionに魅了される方が一人でも多く増えてゆけばいいと、おっかなびっくり「この指、止まれ！」の呼び掛けをしてまいります。

精神分析は宗教とは異なるとは言え、敢えて似通ってる点を申せば、それは究極には‘気’で伝わるものであり、‘知’ではないということです。先生から今回、ユダヤ人でもハシデイズムの系統の人達が精神分析へ傾倒していったというお話を伺えましたのは、私にとって一つの収穫と言えましょう。人が究極に希求しているものが、‘気の充溢（覇気とか生氣とか）’であるということ。しかしそれは、やはりヘレニズム的思考が席捲している雰囲気では、おぞましい(異端?)と受け取られなくもありませんでしょうかしらね。私が今回、「武満徹のような精神分析家」が日本から輩出されることが私の夢だと申し上げましたのは、西欧思想(ヘレニズムそしてヘブライズムのいずれにしても)行き詰まり状態にあるということ、どこかで私を感じてきたからです。それは知(理性)を追及するの余り、身体感覚を極度の犠牲にしたからでありましょう、感情が疲弊しつつあるということです。‘感じられなくなっている’そ

して‘どう感じていいのか、言葉がまるで役に立たない’といった深刻な嘆きが漏れ聞こえてまいります。

渋谷のユーロ・スペースで上映されてましたフランス映画『おせっかいな天使』をご覧になりましたですか？ 精神科病棟での患者らの奇妙なちぐはぐな交流が描かれてましたのね。そうした彼地(西欧諸国)において、だから『精神分析』こそがそれに応えられるものであるとの‘信用’が疑いもないほどに定着しているとも思えないのです。むしろ逆にそうであるはずだという‘幻想’が破綻しつつあるのではなからうかという気がしております。精神分析家が真に勝負するところは「臨床の場」以外にはありません。本当に精神分析は何を為し得るのかの答えは「臨床の場」でしか見いだせないということです。でもそれを我々は(文献レベルですらも)聞き取れているのだろうかという不安が残ります。(これは『現代のエスプリ: 精神分析の現在』についての印象でもありません。)敢えてはしたない疑念を口にすれば、『精神分析』が今や一つの市場価値(商品)であるとしたら、日本は恰好の未開拓なマーケット(市場)であるに違いありません(おそらく彼らの眼には)。東西交流は結構ですが、彼地で破綻(敗北)しつつあるものをそっくり彼らが日本へ導入してこようとしているとしたら、そして日本人がそれをナイーブに唯々諾々として受容するとしたら、それは滑稽になりましょう。それに、自分のルーツから切り離された思想がその人を真に生かすとは思いませんし。それは‘まがいもの’でしかありませんでしょう。

面白いことに日本人はとことん御利益嗜好の民族でありまして、それが限界でもあり、また現実的な強みでもありませんかしらね。なかなかしたたかと申しますか・・・。従って、「精神分析とは何に効くのか」とか、「どんな有り難みがあるのか」が問われましょう。日本の精神分析家はそれに答えられるでしょうかしら？もし出来ないとしたら職業(professional)ではなく趣味(hobby)に墮することになりましょう。でも一方で私は、たとえ彼地で精神分析が終焉を迎えたとしても(21世紀を生き延びれないと誰其が言ってたとか、噂はかまびすしくございますわね)、逆に日本ではまさに精神分析はこれから始まるのだという思いが、私にはあります。感じる事、それに言葉がどんなにか虚しく役立たないとしても、しかしでも言葉は持たなくてはならない、感じられるために、そしてだから精神分析なのだ、私はこれからも希望を抱き続けてゆきましょう。敢えて「武満徹のような精神分析家」と申し上げましたのは、西欧の文化なり思想なりが行き詰まったところにこそ、日本人が何ごとかを貢献出来るといった途徹もない樂觀があるからです。私は日本人というもの或は日本文化の底力をどこかで密かに信じているからなのでしょう。

実は私、座禅を始めることになってます。それから、世阿弥の「花伝書」を朝日カルチャーセンターで受講致しますのよね。今頃と云いますか、でも今だからなのです。私はピオンの「reverie(夢想)」という概念にずうっとこだわり続けておりましたけれども、ここまで自分を生きてみて、また臨床家として様々な方々と出会ってみて、「知っていて、知らない、そして知

らないで知っているわたし」というものにしばしば驚嘆することがございますけれども、この「知っていて、知らない。そして知らないで知っている。しかし、だからこそ動ける」ということ。こうした日本人の知恵(実践知もしくは母性的な直観)こそが、何かしら日本人の底力であり、それこそが西欧人にとっては実は垂涎の的なのではなからうかということを感じるのであります。私も皆さんに倣ってきちんと精神分析をお勉強しなくてはという思いもございますから、徐々にそうしてまいりましょう。そして同時に、この「reverie 夢想」の心的状態を日々の中でどう維持してゆくかということ、大事な課題として、出来ましたら言語化してみたいというのが私の目下の‘野心’であるようです。それら2つ(知と気)が、今後私の中でどう折り合ってゆくかが見物です。益々これからのいい出会いに恵まれてゆきますことを念願しております。

私もこれを機会に、先生ともそして他のお若い皆さん方ともお近付きになれたらいいなと願っておりますので、いつかまた近々お目に掛かることになりましょう。本当にいろいろと有り難うございました。

では、どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



1996年12月12日

Mr. H.S.先生

そろそろ冬枯れの季節を迎えておりますが、原宿駅から表参道にかけて、櫛の

樹木にイルミネーションが瞬き、年の暮れの物寂しさに華やぎを添えております。ああ、これでこの一年も過ぎてゆく、そんな感慨をもたらします。貴方の今年のクリスマスはロンドン最後でもあり、格別なもののおありでしょう。存分に感傷に浸られるのもいいでしょうね。

さて、前年頃より貴方からはいろいろお送りいただいたものがあり、まともにそのお礼をまだ申し上げておりませず、済まなく思っておりました。とにかく有難う。ロンドンで貴方がどのようなことをお考えで日々お暮らしなのか、生活面でも臨床実践面でも、まるで私にはよく伝わってまいりませんもので、ありふれたご挨拶以上には応答のしようが無い印象がございまして、いつか貴方から何かおたよりがある迄はとついそのままになっておりました。ここにご無沙汰のお詫びを申し上げます。

それで今回、＜自閉症の心理療法：ストクライン派の実践＞の論文を頂戴いたしまして嬉しく思われました。とにもかくにもロンドンでの臨床の総括がおできになられたわけでしたのね。良かったですこと。それから例の訳本『クラインとピオンの臨床講義』は岩崎学術出版社から先日届けられてまいりました。どうも有難う。そちらはともかくとして、貴方の方の論文から、この年月のタビストックの思想の変遷らしきものが窺われ、それなりに興味を覚えました。一言で言えば、おそらく「精神分析における身体感覚の復権」ということになりましようか。最後の辺りでスピリウス及びメルツァーを借りて貴方がおっしゃっておいでのこと、

これは今後声を大にして語られてゆかねばならない重大事でありましよう。それでも勝ち目があるとも思えませんがね。全体の趨勢を見れば、精神分析というものが身体感覚を、罪を宿す諸悪の根源として、殺ぎ落としてゆくことにひたすらこの1世紀を費やしたと思っております。その結果、肉体的には勿論のこと、精神的にも又、己自身がそして患者らをも、「不感症(冷感症)」にさせてきたのではなかろうかと感じております。私がメルツァーを好きなのは、彼にはそれに抗うだけの覇気・スピリットがあるということです！心理臨床家としての基本、自由連想能力(想念を瞬す力)そして応答能力(それを相手に命を育む息吹きとして伝える力)をやわらかく暖かく育ててゆくことが至極困難になっております。日本の精神分析の状況は、そうした世界的傾向の陳腐な模倣でしかありませんから、学会などに出掛けますと、如何に皆さんが躍起になって、「手無し、口無し、心無し」になっているかを目の当りにして、私などは悲しみと憤りを覚えるのです。何よりもパトスがない、人が人を想う熱情がない。これでは何のための誰のための精神分析なのかと、寂しい限りです。おそらく貴方も今後日本でそうしたことに直面し、慎重に果敢に闘ってゆかれますことでしょう。

さて、貴方の帰国前に一度こういう観点から周りを見渡してご覧になられるといふと想うことがございます。それは、クライン精神分析の生命線は[the combined object]にあるということです。貴方は児童臨床に携われておいでですから、それをparanoid-schizoid

positionとの関わりにおいては観察することは十分におありでしょうが、これがdepressive position への移行において(つまり心が成長する過程において)、どのような変容がもたらされるのかの実際においては、どなたもが大して注意を払っておいではなさそうな…。如何がですかしら？それが今回の訳本においても、精神分析の‘未来’を語っていないという意味で、物足りなさを覚えた点です。(Ronald Britton という方が、最後の詩篇「魂と肉体との対話」の引用は目新しく、面白いと感じられましたけどもね。) クライン派精神分析家として名乗る以上、自分の中に、この[combined object]の様相をじっくり見据えてゆく真摯さだけが、本当の意味で患者に応答し得る力の源泉になろうと思われるのです。私がこうしたことを考えること自体、面白いのですよ。日本で外来思想が(仏教・キリスト教が、そして精神分析が)日本人の心性において濾過され、何を最終的なかたちに結実・結晶してゆくか、そこには何やら普遍的原理のようなものがあるみたいなのです。そういう視座においてこそ、「クライン精神分析」は日本において尚発展の余地をもたらす土壌を確保できるのではなからうかと考えられます。

しかしながら当面の切実な問題としては、日本にお戻りになられて、お気づきになられますかどうか、今や誰しもが、子どもに限らず、おとなも、男も女もですが、真にからだが危機的状況にあるということの実際です。声が届かない、からだが接触を避けている。つまり互いが互いに対してからだの受信機・発信機が

いくなればOFFの状態にあるのです。(貴方のロンドンで診ていらした自閉症の男子の症例記録の中にありましたでしょ。母親が車の中で読書に没頭するあまり、セッションの終了時間を過ぎて、貴方に連れられて戻ってきた我が子になかなか眼をくれようとしなかった。あの状態が慢性的に日々の日常を侵食していつているのです。)

一方で、朗読ブーム(主に女性の間で)があります。子どもへの本の読み聞かせの大事さが提唱されております。解釈は言葉であり、言葉は声であり、声は響きなのです。それは、命の息吹を注ぎ込むことなわけです。命あれかしと願う、そして祈る心ですのね。

つい最近、「東海・中部精神分析セミナー」に招かれまして、私はこんな話を致しましたの。近頃「生命的」という言葉にこだわっている。精神分析がいかにかに生命的であるか、分析家としても私自身がいかにかに生命的であるかということ。分析の場で、私は以前言葉さえあればって想いがひと頻り強く、言葉が欲しいということばかりで、言葉に執着していた。人の心の闇の中に手探りしている中で、言葉が光・照明を当てる、そこに見えないものが見えてくる、聞こえないものが聞こえてくる、そんな手応えを頼りに、おっかなびつくりながらも何とかやってきた。で、ふと最近それはそれとしてだが、もっと別の何か、相手と自分との命が響き合うというか、命を貰ったりあげたりしているって感覚を覚えることがあって、それはそれは嬉しいことでしたのね……と。まあそんなお話でしたのよ。

貴方の帰国後の日本でのご健闘を期待しておりますね。

ではご機嫌よう。

山上 千鶴子



1997年7月1日

Mr. H.S.先生

お元気でいらっしゃいますか。貴方ももう直に日本にお戻りになられるとのこと。随分と長かったわけですから、荷造りも大変でしょうね。イギリスは今が一年のうちで一番陽差しの美しい時期かしら。庭々にそれぞれに丹精を込めたご自慢のバラが美しく咲き誇っておりますでしょう。公園の芝生の緑もまぶしいほどかしら。イギリスには懐かしい、本当に捨て難いものがたくさんありますわね。

日本はそろそろ梅雨も終わりかけて蒸し暑く、蛍の出る季節でもありますよ。昨今環境汚染が甚だしく、人々はその反動でかまるで悪あがきするみたいに、蛍への郷愁を深めているみたいで、この時期、あちこちで蛍の里へのバスツアーの広告が眼に止まります。私もその一人というのではないのですが、先日たまたま友達に誘われて、電車で都心から1時間ほどの郊外へ蛍を見に出掛けてまいりました。「泉の森」という名称の整備された人工池の一角に蛍の棲息地がこしらえてあるわけです。半信半疑で暗闇の中で待っておりましたら、樹木の間にはスウィ～スウィ～と蛍の光がゆらめき、1匹2匹と見つける度に思わず歓声を上

げて、まるで子どもの頃に戻ったような興奮をしばし覚えたのです。こうした類いの興奮、それを何と言ったらいいのかしら、からだ心が癒されるという意味で‘生の衝動’を促すものと言ったらいいのかしら、実はそれこそが最近の私の関心ごとなのです。

貴方もいろいろと日本で新聞を賑わしている事件をご承知でしょうが、とんでもないおぞましい犯罪がどんどん低年齢化しつつある現状です。端的にいじめの実態にも現れているように、子どもの心の荒廃は、それは社会の荒廃を反映しているとも言えましょうが、今や異常事態とも言えます。それで精神分析に携わるものとして一番に憂えるのは、生きることの興奮、それは感動とも言い換えた方がいいでしょうが、それが人々の心に欠如しつつあるということです。興奮が過剰に抑制されるか、過剰に刺激されるか、そのいずれかなのです。そしてそれらが「死の衝動」への傾斜を孕むものとして考えるとき、日本が今陥っている落とし穴が見えてまいります。

例えば、私の分析患者で現在就職活動している女子学生がいます。彼女を通して、企業が求める人間像（表ではなくて、裏のホンネ）が浮かびあがってきますが、それは何といっても横並び感覚の強調です。例のルクルート・ルックにしても、確かな筋の裏情報では、紺のスーツでなければ落とされるということなんだそうです（灰色でもダメですって！）。それは例の校則の延長上にあり、どこまでいっても子供たちの成長にこの人間の画一化が

執拗に付いて回るのです。多くの若者は、そうした大人の思惑に逆らわず、「傾向と対策」で就職戦線を闘い抜こうとするわけですが、ちょっと批判的に物事を考えるタイプですと、結局は就職戦線から脱落してフリーターするところに落ち着くようです。そのどちらが賢明なのか判断に苦しみます。私が親ならば、どうしたかしら？ そして貴方が親ならばどうするかしら？

こうした閉塞感の中で子どもの犯罪が増加してきて、つまりはその鬱憤を手近なところで、親、教師、そして弱い子どもを標的にして晴らせんとするわけです。実は或る猟奇事件が起こりまして(中学校の校庭に小学児童の男子の切断された首だけが置かれてあったというもの)、その犯人が何と14歳の中学3年生ということがつい最近発覚しまして、日本列島は暗澹たる悲嘆の声に包まれておりますのね。その彼がご丁寧にも神戸新聞社に送り付けた<声明文>というのがありまして、その中で殊に私が注目したのは、<人の痛みのみが、ボクの痛みを和らげる事ができるのである・・・>という箇所です。クラインの精神分析こそ、そうした心の錯綜を見据え、そしてそれを克服せんとして必死にあがく人間を擁護するものとしてあるというのが私の信条です。まあそんなこんなでして、今や人間の心の中で起こるconversion(回心)というものに、私の関心が大きく向けられておりますのね。こちら辺り、貴方はお解りになりますかしら？

ともかくにもこれから貴方が帰国

後ご活躍なさることを思うとき、とんでもないものを敵に回すということの覚悟が必要になりますよということを示唆したことになりますが、私が貴方にぜひ期待したいことは、貴方の精神分析が生きることの興奮・感動を呼び覚ますものであって欲しいということなのです。私は、精神分析というものは幸福を追求するものとは無縁だと教えられたのです。でもその時も今も尚、それに私は抗っているわけです。貴方はいかがかしら？

率直なところ私は、日本に『精神分析』がどうかたちで根付いてゆくものかの決め手なるものをついぞ見落としたままなのではないかといった焦燥感に駆られるのです。アメリカ人であるDr.メルツァーがおっしゃるには、イギリス人の分析患者を相手するのに慣れるのには10年は掛かったということです。さもありませんと軽く聞き流してましたけど、それが真実どういう体験だったのかを彼に詳しく聞いておくべきだったと悔やまれます。‘国民性の違い’という乗り越えがたい強固な壁の前に彼もまた懊悩を深めたのでしょうかしら。だからこそその熱烈なピオンへの傾斜、さらには英文学への傾倒であったと推察されます。遮二無二‘英国なるもの’を取り込もうとされた。で、彼は英国人になったのか、なれたのか？ おそらく違うでしょう。こちら辺りは実に微妙です。誠に、私もそうなのです。元々日本人である私が言うのも変なのですが、開業して17年目にして、今でも日本人の分析患者を相手に日本語を駆使しながら分析することがどういうことなのか、分かったとも慣れたとも言えないのが実情です。この不確実性に

竿を挿しながらも、どこかしらいつも分析セッションの流れに身を委ねているといった、妙な按配で舵取りしておりますような具合です。

私の場合、幸せなことには分析患者に恵まれ、皆さんご自分なりの居場所を得られて、面白く生きることを展開しておいでなのは救われておりますが、臨床実践の中で自分が使ってる日本語が、彼地でやっていた児童臨床とどう繋がるのか、それは個人的に私の内面ではそうだとすると、いざ解説すると、とても難儀致します。それでずうっとクラインをもメルツアーをも読むことを敢えて避けておりましたの。それが今回岩崎学術出版社より『精神分析事典』が刊行されることになり、私はその中の『リチャード「症例」』という項目を担当させられましたもので、これを契機に『リチャード』に立ち還ることとなり、なるほどと気付いて痛快に覚えましたことは、リチャードについてのクラインの読みの中にクラインがおり、メルツアーの読みの中にメルツアーがいて、そして私の読みの中に紛れもなく私自身が在るということです。そして「クライン精神分析」というものがとことん未完であるということ、つまりそれは補われるべき余白がいっぱいあるということです。一人一人がそれを埋めてゆけるかどうかです。いつか貴方のリチャードについての読みを伺えたらと思っております。

実のところ、私は深く悩んでいるのですのね。日本人を相手に分析しておりますと（大概是成人なのですが）、その内容は、殆どが「外的事実」、すなわち親がどうでこうで、

そして今の自分とそれがどう絡み合っているかに終始しがちなのです。実際私の教育分析の時はまさにその逆でして、「内的現実」に焦点が合わされてましたから、分析家にとって私の父母が事実上問題視されることも殊更興味を持たれることも皆無に近いのでありまして…。記憶がありません。それは常に転移として、彼女自身或はメルツアーとの絡みで解釈をされました。今日本で私がクライニアンであると名乗ることに躊躇を覚えるのは、実にその点なのです。彼の地でとの比較において、こうした感触の違いにはこれからもひたすら悩んでゆくだろうと思われまます。貴方もご帰国後どうぞ此の地で一人の種撒く人として地道にいいお仕事をなさってくださいませね。もしもお気が向かれましたら、上京の際にでも、ぜひどうぞお訪ねくださいますように。

では、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



1999年1月21日

Prof. B.K.先生

御機嫌いかがでいらっしゃいますか？ 先日は先生より大変ご丁寧なおたよりを頂戴いたしまして、恐縮いたしております。「仏像のカレンダー」はお気に召していただきましたようで、私としましても嬉しく思われます。

近ごろ徐々に老いを感じる年齢だからなのでしょうか、たくさんの事柄がどうでもいいものと断念されてまいります。そして唯、わずかに美なるものだけが心の慰めとして残って

ゆくように感じられてなりません。実際に周りを見渡せば、それこそ阿修羅の如く憤らねばならないことが世間には満ち溢れておりますのに…。

さて、ご依頼いただきました『早稲田心理療法セミナー』の講演は無事済ませまして、ようやく先生とのお約束を果せましたことに安堵しております。受講生の皆さんからの事前のアンケートへの応答として、さらには現在自分が関心を抱いております事柄、つまり「精神分析的言語とは何か？」について、皆さんにお話しさせていただきましたわけで、今回準備するに当たり、たくさんの方が私の中で整理されたように思われます。予め「出来るだけ砕けた言葉で…」と先生からご示唆がございましたことに留意し、日頃私が敬愛するすぐれた詩人たちの詩の朗読を折々に挟みながら、お話しを進めました。1日目は、皆さんに分かるかな、大丈夫かなとおっかなびっくりで、ただどしくありましたが、まあ分からなくもなさそうな感触を得ましたことで、2日目は結構リラックスしてお話しできたように思われます。ここに至ってようやくだいたい講演に慣れてきたなと感じられましたけれども、慣れは馴れにつながり、ちょっぴり怖さもありまして、何を語るかというよりも、そもそも語ることはあれもこれもとごっそりあるわけですから、むしろ何は話さないかということの判断がより難しいといった感想を抱きました。これは新しい気づきです。

私にとって講演という場は、現在の自分を総括し、未来に向けてわたしはどのような歩みをしてゆくのかといった態度表明をして

ゆく場と考えております。そこに受講者の皆さんそれぞれが何かしら感ずるものをご自分の中に抱えてくださることを希望いたします。「精神分析」が人から人へと真に伝播されるためには、実際のセッション以外ではそれしか方法はないと思うからなのです。それがどんなに拙いものにしろ、或はどんなにか迷いと悩みに満ちていようとも…。

「ヒューマン・リフレッシュ・センター」の方から、来年度も講演をぜひにとのご依頼を頂戴しましたが、一応今回のセミナー受講者の皆さんには十分に申し上げるべきことは申し上げましたので、これ以上は不必要と判断いたします。もしもどなたかがそれ以上に私に何かをご希望なさる場合には、個別にお相手させていただくことになりましょう。

実は今回私の方でも興味を覚えましたので、受講者の何人かの方々に感想なり、またご自分について語っていただきましたのね。それが、出てくるわ、出てくるわ。あらあらと内心慌てました。皆さんそれぞれに深刻な事情をごっそり抱えておいでらしいという印象がしましてね。ああいう集団の場ではとても対応しきれないと思われましたわけで…。中途半端は良くありませんし、適当にお茶を濁すだけの応答も私は厭ですし、もしかしたら場合によってはそのまま蓋をしておくに限るということもありましょう。それぞれの苦悩は得難くもその人のものなのですし。安直な答えをただばら撒くことだけは慎みたいわけでして…。

ふと或ることに思い当たりましたの。

キリスト教の或る宣教師の嘆きとして、「どうやら日本人にとって‘創造主なる神’というものは決して決して解られ得ないものようだ」ということを耳にしました。私はそれとも違いますが、でも同じく、大概の日本人には言葉の創造を通しての精神の自由を希求する、即ち『精神分析』などというものは、決して決してなじまないものだとし心ひそかに嘆息せざるを得ない気分になることがございます。縁なき衆生、ああ、それもあるということを…。どうやら究極には信仰の問題になるということではないかしらとも考えました。言葉(理性・知性)への信仰、精神の自由への信仰、煎じつめればそこに至りましようから、万事慎重にならざるを得ません。

先生は大学という教育機関で学生たちに精神分析を教えることに時折無理をお感じになられることはありませんかしら？ 私はたじろぎを覚えますの。もしもそれが本当には信仰の問題だとしたらと考えるてみたりするものですから…。

さてご承知のように、先日先生よりご紹介いただきました院生のMrs.W.Y.さんがこちらで教育分析をご希望ということでお越しでした。とても好感の持てる女性ですよ。でも残念ながら、分析を受けるための機縁が見当たりませんでしたの。もしかしたら健康すぎるということが問題なのかも知れないって、後で私ちよっぴりおかしく感じましたけど…。

何を自分が見たいのか、本当に自分が見たいもの、それが精神分析の中にあるという確信に乏しいわけです。決してお断りし

たわけではありませんの。でも無理をさせることに私が無理を感じたわけで、だから本当に自分が見たいものが何なのかという課題を差し上げて一応面談を打ち切りました。本当に彼女がそれを見つけれたらいいと、私は彼女のために祈ります。それが精神分析じゃなきゃならないなんて絶対ありませんもの。彼女なりの幸せを探して欲しいと思うのです。でもちよっぴり本音を言わせてもらえば、まあ信仰ということであれば、誰しも同志は一人でも多く欲しいわけでして、こうした場合、ああ残念なって気持ちは、私の中に微かに痛みとしてございます。ご一緒にお仕事できたら良かったのにつて…。

素朴なところで私の中では、一人一人の‘声’を育ててゆけたらいいという望みだけがあると申せましょう。それに正直なところ、この20年間の臨床において、それで一番得した人は誰かと言えば、実は私自身なのですから…。そして、最近嬉しいことに自分の声に言葉に躍動感がどうやら出てまいりまして、これからの自分が楽しみになっております。これ迄の先生からの度々のご支援に厚くお礼申し上げる次第です。では、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



1999年6月30日

Prof. B.K.先生

ご無沙汰致しております。いよいよ本格的な梅雨の訪れ、陽射しの恋しい季節となりました。いかがお過ごしでいらっしゃいま

すか。

ついついお礼を申し上げるのが遅くなりまして心苦しく思われておりました。これまで度々先生から※※大学の院生の方々を私どもへご紹介いただきましたこと、深く感謝申し上げます。ご承知とは思われますがつい最近個別スーパービジョン(Private Supervision)にお二人、〇〇さん及び〇〇さんがお越しで、教育分析(Personal Analysis)の方には今も尚、〇〇さんそして〇〇さんが毎週継続してお越しでいらっしゃいます。それぞれに優秀で得難い人材といった印象でして、とてもお付き合いしていて楽に思われ、まさに先生並びにProf.I.K.先生がご苦勞なされて耕されました土壤に、こうして種を撒くことをさせていただけるのだと痛く喜んでおります。厚くお礼申し上げます。

それでも敢えて申し上げますと、やはりスーパービジョンの難しさを改めて感じてしまいました。どうしても心理臨床というものが職業教育化している嫌いがあるのでしょうか、器用にもそこそこそれらしき言葉を身につけてしまいますせいか、どうしても我身に照らして相手に注意を向けることが怠りがちなのでしょう。つまり哀れむとか心が痛むとかの心の動きに乏しい嫌いが窺われます。本来はそこからしかセラピイの言葉は生まれないものだという気がしてなりませんのですが……。

それとは別個に、そしてもしも心に余裕がないとしたらおそらく関連がなくもないでしょうが、心理臨床家の経済的な身分の保証という点で彼らの現実の苛烈さをあれこれ

伺いますにつけ、啞然とする思いが致しました。贅沢なことと言ってられないという諸事情。そうであっても尚、心理臨床というものが「人間を作ること」だとしたら、何としてでもこの「贅沢は敵だ」を突き抜けるしかないと思われてなりません。私は日頃から皆さんには、我が俣のすすめ、遊びのすすめ、そして贅沢のすすめを提唱したいと思っておりますけれども、どうもこの侘しい現実では口を嚙むしかありませんようで……。そしてそれぞれがご自分で生きる道を切り拓くべく奮闘なさって、力を蓄えてゆかれることしかありませんような……との感慨を抱くにつれ、ちょっぴり辛く思ったりいたします。学生の皆さん方に私がお役に立ちますかどうかは実際には心もとないものがございますけれども、私のところにお越しになられること自体がどなたにとっても決して容易ではないという事実を、改めて考えさせられましたような次第です。私がどなたに対して「無理をさせない、無理をしない」という方針を堅持してまいりましたけれども、さてさてどう致しましょうと、これからを考えあぐねております。いい勉強をさせていただきました。

教育分析PersonalAnalysisということにつきましては一般を対象とした分析治療にしても同じではありますけれども、本当に薄氷を踏むに似ておっかなびっくりなのでございます。しかしながらまあようやくここに至って、ほんの一握りの方々ではありましても、そこそこの期待が持てなくもない、そんな可能性が見えてまいりました。それぞれが固有なるキャラクター(自分らしさの輪郭)を持ちつつある、そんな

な手応えと申しますか…。先生から随分以前にご紹介いただきました〇〇さんも尚も継続中でして、なかなか面白くお付き合いさせていただいております。逆説的ながら、内的な蹉きへの感受性を鋭く持っておいでの方でして、厄介は厄介なりに、私としましてはお相手のし甲斐があると、まあそんな印象でございます。〇〇さんそして〇〇さんにしましても、些か危ぶんでおりましたけれど、どうか分析に根を下ろしてゆかれそうなお様子で安堵しております。それぞれにまずまずなかなか頼もしく、これからもセッションの回毎に某かの気づきを拾ってゆく地道な努力を続けてまいりましょう。ご一緒にきますことを嬉しく思われます。

最近ひょんなことで『桑沢デザイン研究所』でデザイン専攻の学生さん相手に講義をする機会がございました。「心のかたち・モノのかたちー精神分析と造形芸術の出会い」という演題でしたが、なかなかおもしろい経験をさせて貰いました。精神分析の知識の殆ど皆無といった方々を相手に話すというのは初めてで、それが案外分かり易く話すことが出来まして、難しい話をこんな風にくだけて話せるようになってると、我ながら驚いたりしましたけれども。実のところ専門職の方々にもこんな話から始めるのがいいのかしらと、あれこれ反省してみたり致しました。

確かに分かり易く語れるということはいいいことですが、でも実際の臨床と言えば、何とも複雑怪奇で、やはり纏れた糸をほんのわずかずつほぐすような面倒臭さやら、五里

霧中の中で筋道を付けてゆくような厄介さがあり、どうしても丁寧な仕事をめざすならば、一般向けに分かり易く広めてゆくのもどうかかとやや懐疑的になったりしてしまうのです。

さて、私ごとでありますけれども、最近恩師を亡くしました。私にとって精神分析の道に進むきっかけをいただいた大切なお方なのですが、逝かれてしまって改めて彼は私にとっては何であったのかと、ここしばらく自分の中で彼を偲びながらその眼差しと向かいあっておりました。人は生きて人と出会い、そして掛け替えのない因縁を結ぶのですねえ。そこで何かが手渡され、そして担われてゆくということがありましょ。そんな「引き継ぐ・引き継がれる」ことの妙というものをしみじみ覚えずにはいられません。先生もそろそろ※※大學をご退官なされる由伺っております。お若い方々をお育てになられるのは本当に楽しくもあり難儀なことでもありましたでしょう。私はこの年になってふと顧みますと、不思議なことに我知らずのうちに私という存在が、誰かが生きられたことの、そして時には、驚いたことに、誰かが誕生することの契機・媒介になっているということに気付かされたりするのです。この不可思議さの故にこそ、しみじみと《終に無能無才にして此の一筋につながる》(芭蕉)なのかと、感慨を深めておりますような昨今なのであります。さて、先生のご心境は如何がでありましょかしら…。 それでは、どうぞご機嫌よろしく。

山上 千鶴子

.....



2000年1月24日

Prof. T.K.先生

ようやくお年賀気分も薄れて、ただひたすら春が待ち遠しいですね。店頭で早ふきのとうが出回っているのを見つけて、心嬉しく買い求めてまいりました。塩水に浸した時のむせるばかりの春の香り。一晩おいて、ふきのとうのクルミ和えの一品を作りました。そのほろ苦い味を舌で愛でながら、気持ちが「春よ来い、春よ来い…」と歌っておりました。

さて、先日はお年賀状を頂戴致しまして、いろいろとご記憶いただいておりますようで、とても有り難く思われました。先生のご活躍のご様子は何かと耳に入っております。『心理臨床研究』のジャーナルでお書きになされたものも読ませていただきました。日本における母子臨床のひとつのあり方ご提示なさっておいでのように理解しております。臨床家としてご自分なりの無理のない姿勢を身に付けられましたことはとてもお幸せなことに思えます。どうぞこれからも良いお仕事を。

また、私どもで『研究会』はあるのかというお問い合わせでしたので、ご返事申し上げます。それが全然なのです。いつの頃からか徐々にごく自然に現在の自分になっているわけですが、つまり「無理のない(無理もしない、また無理もさせない)姿勢」を貫いていたら、こうなったというしかないのです。敢えて申し上げれば、ことばの問題です。臨床の場において使

える日本語の《精神分析的言語 Psychoanalytical Language》がいかなるものかを見極めたいというのがありまして、ことばを手探りしておりました。症例研究会は勿論、個別スーパービジョンすらも、そこで使われることばがどうしても解説的・説明的・概念的になる恐れがありますため、極力避けてまいりました。ここ数年の間、講演などにも出掛けるようにはなりませんでしたものの、それが案外とても噛み砕いたやさしい話をしている自分がいまして、講演慣れというものもよし悪しだなと反省頻りなのです。専門職にあるお若い方々とご一緒することがありますが、昨今どうも職業化の傾向があるのか、それぞれの持つことばが上滑りといった印象が拭えません。勿体ないことだなと私などは思うのです。他人のお世話、それも結構だけど、本当は自分のお世話がとても大事だし、実は一番面白いはずなのにつて…。

そこで「個別スーパービジョン Private Supervision」の場合には間接的にはなりますが、そうした気づきに繋がられるように症例の読みをご一緒に解いてゆきます。それで少しはお役に立つこともありましようけれども、でもやはり「教育分析 Personal Analysis」が面白いのです。手応えが違います。他人にいつも自分を与えなくてはならないこの職業はひどく苛酷です。自分に戻ってゆける場が確保されているということ、どうやらそれがどなたにも一通りの安心をもたらしているように理解しております。精神療法の何派に属していようと、そうしたことが肝心だと私は思っております。クライニアンとしての私以前に、心理臨床に携わる若い

方々がしなやかに心を育ててゆかれるようにと、そんな願いがございます。言い換えれば、「クライン精神分析」を勉強したいという方がおられましたら、それは違うと申し上げたいのです。まずは自分よくなって、そんな風に考えております。実際に先生は大学におられますから、おそらくそうしたことは一番良くご承知で、日頃お悩みになられておいでなのじゃありませんかしら。そのようにお察し申し上げます。研究会はこれからも催すことはありませんけれども、どなたにも門戸は開かれております。それで、お入り用かどうかは分かりませんでしたけれども、ご参考までに『ご案内資料』を同封させていただきました。

どうぞますますご健康で、お励みくださいますように。 それでは、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



2000年3月2日

Prof. B.K.先生

先日は※※大學ご退官を記念されて出版されましたご著書(『精神科臨床と精神療法』・弘文堂)をお届けいただきまして誠に恐縮いたしております。早速に拝読いたしました。日頃私などの眼に触れることのない幅広い豊富な文献の類い、それに私などの手の及ばない患者さんたちの貴重な臨床例の数々。大変に勉強させていただきました。厚くお礼申し上げます。

特に臨床例の叙述された記載箇所は圧倒的な迫力がございまして、この現代とい

う時代の底知れぬ闇(カオス)を垣間見るような思いに肅然といたしました。この混沌(纏れた糸の絡まり)をどこからどう解きほぐし、筋道を組み立ててゆけるものか考えあぐねておりました、ある一つのことが思い浮かびました。

それは人々の心の中で、生きること・生きてることの‘疚しさ’がごまかしようのないほどに昂じているということ。疚しさは罪という言葉に言い換えることもできましようが、私は‘疚しい’という言葉の方が、自分のいのちが、存在そのものが薄汚れているという実感により近く感じられ、それは日常あまりに取り沙汰されませんし、おそらく心理臨床場においてもそうでしょうから、尚更にこだわってみたいと思われるのです。この疚しさが自己侮蔑につながるのには勿論でしょうけれども、それ以上に周囲の誰彼に侮蔑のまなざしを向けることでその疚しさが雲散霧少されるという巧妙な心理的からくりが目立ちますことが憂慮されます。クライン流に申せば「過剰な投影同一視」いうことになりましようが、誰しも「生きててゴメンナサイ」と思うよりは「何だ、てめえらは・・・！」と居丈高に出る方がまだ生きてることは楽かもしれませぬわけで・・・。しかしこの過剰な投影同一視がやはり‘シニシズム’にもつながり、昨今多くの若者たちに危惧されているところの‘いのちの薄さ’に関連していると思わざるを得ないのです。随分昔のこと西谷啓治という哲学者(京都学派)が時代的要請として「シニシズムとの闘い」を宗教・哲学の立場から唱えておいででしたが、実は最近のこと、私個人と致しましても、疚しさから派生するところの‘シニシズム’が

生命を枯渇させてゆくものとして、患者たちひとりひとりの出会いを一つの機縁としながら、このシニシズムとの闘いを、自分にとりまして、臨床家としてもですが、またそれ以上に個人的な命題ともようやく考えるに到っております。やはり疚しさ(罪)を引き受けるしかない。いのちの充溢とはそれ以外に道はないと思われるのですが。確かに‘理性の狡智’があっちこち逃げ道を探してくれてはいるのです。精神分析というものも案外その理性の狡智の道具になりさがっているということはないかしらと内心危ぶむ気持ちが募っております。日本における精神分析の動向をあれこれ耳にする折りに、党派性に傾き、つまりは権力の奴隷と化し、こざかしくも要領良く立ち回ることに長けた人々が断然優勢になって群れを率いているといった困った印象を抱いてしまっておりまして…。せっかく優秀な方々がお集まりなのでしょうから、さまざまな分析理論の流行に翻弄されずに、しっかりと臨床に根差したご自分のことばを育ててゆかれることを期待したいのです。

この20年の臨床において、私は分析家として自分が使っていることば、それがいかなる言葉なのかとさまざまに考えめぐっております。ギリシャのロゴス、ヘブルのダバール、日本の言霊。あっちこちと模索しながらも、自分の「臨床言語」がどのように変わってゆくかを見据えております。その観点からしましても今回頂戴いたしました先生のご著書の中でもとりわけ「ガエターノ・ベネデッティの分裂病の精神療法論」は注目されました。私は分裂病患者を対象にした分析を一切しておりませ

んから、まったくの門外漢でしかありませんので、それを技法として評価する資格はありませんけれども、ベネデッティの臨床の中で使われることばは何と新鮮に響くのでしょうか！まず何よりも音声としてあるということ、聴かれることば、呼び掛けのことば、人格的な交わりのことばとしてあるという点に痛く瞠目いたしました。彼はユダヤ系なのでしょうかしら？彼のことばは響きとして患者に届き、そして患者を包み込む。患者の心的状況に寄り添うことで直感的に(詩的に)それを言語化し、要は「あなたは一人ではないのですよ…」と呼び掛ける。この能力こそ日本に定着されてゆくことが急務であり、今の日本の現状においては未だビオンもラカンもまったく害あって益なしだと私は思っております。

5年ほど前頃から私の実姉が、連れ合いが画家でして、その彼がニューヨークで個展を催すということで付き添って出掛けまして、その度ごとに彼地で精神分析が廃れかかっている実情を聴かされてまいります。また映画などで時折精神分析が取り上げられているのを見ますと、呆れるほどに古典的というか旧弊というか、これじゃ患者さんに恨みを残すしかないわよねといった印象でして、欧米の分析事情はまったくもってお寒い限りと常日頃思っておりましたけれども、此度先生からの情報でベネデッティを知りましたことで、何か新しい芽吹き新时期を迎えているのかしらと、だったら私も勇気づけられた思いが致しました。じっくり考えてみるつもりであります。

つい先日のこと、かなりの年数を経

て今も熱心にPersonal Analysisに通ってこれておいでの或る心理職の女性なのですが、どうしてここに通いつけているのかとの私の問いに、<自分の音はやかましい音だ。それでどうか澄んだ音にしたいから・・・>と申されました。確かに、心理臨床家として有能ではありましようけれど、騒々しい、アクティング・アウトの実に多い、まことに懲りない方なものですから、そう伺って思わず苦笑してしまいましたけれども、ハッと胸を衝かれる思いも致しましたのね。そうだとしたら、私は彼女にとっては‘調律師’ということになる。彼女の音が外れたときにはそれを正すことができなくては・・・。それならば尚更私の音は澄んでいなくてはならないわけだ・・・と。

それとの関連でふと思い当たりましたんですが。先生からいつぞやご紹介いただきまして現在もこちらでPersonal Analysisに継続してお通いの※※大學の院生の方々が幾人かおいでです。それがなんと私を選んでくださった理由なのですが、勿論Prof.B.K.先生並びにPro.I.K.先生がご推薦してくださったからということでしょうけれど、実はもう一つの決め手は、皆さんどなたも一様に私が「隠遁している」からというものにして、このことばを聞かされたときには戸惑って一瞬啞然と致しましたの。民俗芸能のフィールドワークであちこち駆け回っておいまして、まさか私が‘隠遁’なの??と不可解に思われましたけれども、ああそうか、皆さん方は私に‘澄んだ音’を期待しておいでなのかなと得心されまして、それには真摯にまた肯定的に応えてあげられたらいいと、改めて

心したような次第です。

お3人ともそれぞれに健康な覇気が元々備わっていらっしゃる優秀な方々ですし、お相手するのは嬉しくもあり難しくもあります。私の使いますことばがいかなるものかを深く知ろうとするほどにはまだ関心は育っておりませんが、それぞれが実に素直に自分と向き合うことを学び始めておまして、どなたも全体にスッキリしてきたといった印象で、それぞれの魅力がそのまま素直に発揮されてゆくようでもあり、私の側としましても愛情を注ぐことが楽に思われて、嬉しい限りです。こうして先生からいいご縁をいただきまして、それによって自分が活かされていると申し上げられることをとても有り難く思っております。

人と人との縁が結ばれるとはなんと不思議なのでしょう。実は昨日、〇〇さんという方から丁重な御礼のお手紙が届いておりましたの。当時高1の男子の母親で、その息子さんが強迫洗浄で軽い分裂病と診断されて、先生から私の方にご紹介のあった方らしいのです。かなり以前のことで、実は私の記憶はうろ覚えなのですが、先生はご記憶ございますかしら？それが確か一度だけ「診断面接」ということでお越しいただいた模様なのですが、どうもその日をきっかけに症状も軽減されてきてと、あれこれ事細かに彼の目覚ましい成長ぶりを報告してこられました。現在早稲田大学の学生さんで自立した頼もしい若者になっておいでの様子ですよ。あらあら良かったこと、でも今一つ私との関わりはどうか？？とも

思われましたけれども、ここで先生と私との繋がりの中から、一人の有能な若者が世に送り出されたと思えば何とも嬉しいことに思われました次第です。ただただ素直に喜びたい、そして先生にもと、一応お耳にお入れした次第です。

「分析患者」というのは長く付き合っておりますと、七転び八起きでようやくほっとしたと思いきや、又々こけたということになるものだということをしばしば経験させられます。大してお役に立たずに誰もがいつしか私の元を去ってゆく。そして残されたものとは私の中に培われた言葉しかないなどと妙な感慨を抱いておりますところ、もしかしたら、それは私の中だけではなかったのかも知れない、その言葉は彼・彼女の中にも蒔かれたのであり、それはいつか時期を得て芽を吹くということがあったのかも知れないと、こわごわながらもおっかなびっくり樂觀を抱き始めたようなところでございます。

さて、ご退官記念パーティーもお済ませになられてホッとしておいででございましょう。お疲れを癒し、また御苦労さまとご自分をねぎらわれます安らぎのひとつにどうかしらと思ひまして、それに此の度頂戴いたしましたご著書への御礼も兼ねて、ほんの心ばかりものですが、お届けさせていただきました。ご笑納いただければ幸いです。

では、ご機嫌よろしく。 山上 千鶴子



2000年5月15日

Mr. W.S.さま

風薫る候、嬉しいおたよりを頂戴いたしました。ご結婚おめでとう！！

お若い二人の幸せそうなツーショットを眺めながら、こちらでの分析セッションにお通いの当初からも、さらにはそれ以後の歳月をとおしても貴方のひたむきな頑張りがさまざまに実を結んでおいでのご様子が窺われ、頼もしくも嬉しくも思われたことでした。本当に良かったですわね。

※※の地で保護監察官のお仕事をしておいでとのこと。現代は、実に難しい時代に突入しておりますような…。人の親になることにも人の子どもであることにも、難しさは募るばかりです。しかしながら、人の親になることほど貴く、そして人の子であることほどの幸せ以上のものはこの地上には無い、と私などは信じて疑いません。この樂觀(おめでたさ)が支えです。誰しもがそう思えたらいいがなあと願わずにはいられないのね。貴方の日々のご苦勞をもそんな風に乗越えてゆかれますように。そして貴方ご自身がこれからの人生を生きられる限り、‘人の子’であり‘人の親’であることの喜びを味わわれ深めてゆかれますように。

どんなところにも学びは落ちておりましょう。捨るか捨て置くかで、人生まるで違ったものになりましょうから…。どうぞお励みくださいませ。

確か貴方は作家志望でしたわね。どうなさいましたかしら？おそらく貴方はご自分の‘物語’を書くのにはなく、それを生きること

に猛烈に忙しくおいでなのだろうと察しておりますが、そうかしら？それもいい、と私などは思います。一人の有能な作家であるよりは、一人の心ある保護監察官である貴方を、私はこれから応援したいと思っております。どうぞ心触れ合える人と人との繋がりの中で生きてゆかれますように。これからの貴方を大いに期待致しておりますね。では、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



2000年6月26日

Dr. Y.K.先生

梅雨空に真っ青なあじさいが映える季節です。ご機嫌いかがでいらっしゃいますか？日頃ご無沙汰いたしております。又々先生のお陰でとても嬉しいご縁をいただきました。

Mr.T.Sさん(主訴:不登校.19歳)ですが、今月からこちらで分析治療を始めておいでです。先生に早速ご報告をと思いながら、さてどんなものかと様子眺めをしておりましてらつい遅くなってしまいまして、御免なさい。三月にお越しになられた時点ではもうひとつ心もとない印象がありましたけれども、その後ご両親からの後押しもあり、予備校にも通い始められまして、ようやくどうにか分析に毎週こちらに通う態勢が整えられたように窺われましてお引き受けした次第です。依然として掴みどころのない感じでいらして、まるで空洞を抱えた‘木偶人形’なのかしらと、お相手しながらも私自身時折焦る気持ちが出てきたりもいたします。でも夏目漱石の熱心な読者ということでしたし、

おそらく何かしら彼の中で今はまだ声にはならずとも、ブツブツの呟きはそこそこありそうですから、気長に聴き取ってゆくしかないだろうと私としては考えております。

又その一方では、肥大化した自我というのか、まるで仮想現実を生きているかのような、小柄の彼にはまるで不釣り合いな、途方も無いほどの気概を時として吐露なさることもあり、その奇妙なチグハグさに私自身対応に苦慮することもございます。分析セッションの中で彼自身が自分というものへの焦点づけに徐々に慣れてゆかれまして、少しずつ「等身大の自分」を把握してゆかれることを今後期待したいと思っております。

.....恐らくは、このままゆけば‘眠り姫’もしくは‘木偶の棒’でおそらく捨て置かれたままの人生で終わるしかなかったろうとも考えられるのです。また翻って、彼が自らの定められた運命に反逆し謀反を起こしているのやも知れないとして、自らの運命を切り拓こうと足掻くのが人間なのだという考えもありましようから、そうした彼を応援できたらいいと、私自身は願っておりますところ です。

それから、ご記憶にございますかどうか、先生から以前ご紹介いただきましたMr.O.Y.さん(診断名:不安神経症、20歳)はまだお通いで、そろそろ終結です。1996年4月以来ですので、随分経ちます。現在大学院の修士課程に在籍しておいでです。就職活動の方は順調でして、既に内定を4つ貰ったとか、結局のところ外資系の会社に落ち着く模様です。ようやくにしてご自分が楽に生きられる居場所

をどうにか見つけられましたような印象です。先日も‘葦’の話が本人の口から出ておりましたけれども、母親譲りの強迫的な心性やら窮屈な不自由さが緩和されてまいりまして、嬉しくも樂觀が芽生えてきたように見受けられます。元々頭脳はごく優秀な方なのですし、社会に出られましてもどこかで何かを担う人として期待されて生きてゆかれることになりましょう。私としましてはお付き合いできましたことをとても喜んでおります。又、ご縁をいただきました先生には大変に感謝いたしております。誠に有難うございました。

振り返りまして、お二人を比べて見ましても、それぞれにまるで違う。そして私がセッション中に彼らそれぞれに語る「ことば」もまた全然違います。実にそれが面白いのです。新しい方との出会いは挑戦です。それは、私が分析臨床において、どのような「ことば」を創造し得るかへの挑戦でもありますわけで……。私は、この20年来こちらでおっかなびっくりで臨床に携わってまいりまして、メラニー・クラインの勇猛果敢さとは程遠い人生ですけれども、慎ましくも「無理しない・無理させない」ところで、それぞれの中に‘生きられるわたし’を掘り当てる心の作業のお手伝いをしてきたわけです。

そして最近私の中で気掛かりに思いますのは、精神分析の根底にあるものといえますか、‘苦悩する純粋さ／悲劇的なものへの熱情’が日本人の中には相対的に乏しいのではないかという認識です。この観点から申しますと、日本人を相手に分析するというこ

は飽き足りないものになりがちです。社会現象のあれこれを通して見ましても全般に、己を振り返りながら‘疚しさ(心の闇)’を見据える意識というものが脆弱になっているように窺われまして、この日本の行く末が危うく思われてなりません。「精神分析」が此の地に根付くということもないのではないかと悲観が折々に否応もなく頭を過ぎります。しかしまたその一方で最近気づきましたことは、‘苦悩する能力’とはまた別に、「いいもの(=いのち)をいただく能力」というものが案外大事なのではないかということ。私自身、最近頓に、「からだにいいもの・心にいいもの」を取り込む力が欲しいと切実に願っております。目下、伝統芸能をフィールドワークにしております、お祭りの追っ掛けにととても忙しい。お神楽を見たり、祭囃しを聞いたり……。そんな風に祖先たちからの‘お届けもの’をたくさんいただいております。それがとっても「からだにいい・心にいい」と感じられるのですね。それから樹木の観察なども…。植物園とか雑木林とかあちこちを歩き回って、写真撮影を愉しんだりと…。自分がどういう自分になるのかさっぱり見当も付かずに長年考えあぐねておりましたら、案外今やこうして知らず知らずのうちに「自分になっている」、そんな見晴らしのいい所によやく来ているのかしらって、まあそんな感慨を抱いております。まだまだとても自信があるとは申せませんけれども……。

そしてまだまだ挑戦は続くということになります。『わたしの精神分析』がどのようなものになるのか、生きてみてちょっとは分かるかな。そうだといいいけど……って思っております。ここに

『ご案内資料』を同封させていただきました。
私の人脈とか縁故というのはごく限られた狭いものでしかありませんので、分析にお通いいただける方を探すのは至難なことなものですから、此の度のように分析患者さんのご紹介をいただけましたことは本当に有り難いのです。私自身内心では、いいご縁に繋がればいいなあと願っておりますのに、億劫というか臆病というか、まるで自己宣伝を怠っておりますためか、「隠遁しているひと」という風評がありますようでして…。内心苦笑しておりますが。それが案外、専門職におありの方々の場合、そういうのがむしろいいとお気に召されて、お越しになられるということが僅かながらあたりはいたしますけれども…。いずれにしましても、縁は異なるもの。不思議をしみじみと思う次第です。どうぞ今後ともよろしく願い申し上げます。

御礼のつもりが、取り敢えずこんなお喋りについなってしまいまして、御免なさい。先生は、生来の粘り強さで、そして辛抱強さで、日々精神科医療の現場でお励みでございましょう。くれぐれも消耗なされませぬように、どうぞご壮健でいらしてくださいませ。よろしければいつかお暇な折りにでも近況をお聞かせくだされば嬉しく思われます。

では、ご機嫌よろしく。

山上 千鶴子



2001年6月27日

Prof. S.K.先生

ご無沙汰致しております。ご機嫌いかがでいらっしゃいますか？梅雨の真っ只中で、肌寒かったり蒸し暑かったりの変なお天気が続きますけれども、この季節は案外、アジサイやらハナショウブやら、さらにはヤマユリなどの花々が盛りたくさんに咲き競いますので、カメラの機材を背負って花の追っ掛けに興じておりますと、なかなか忙しく、また心弾む嬉しい季節にも思えてまいります。

さて先日は先生の元学生さんでいらしたMiss.K.Y.さんをこちらでの分析治療にということでご紹介いただきまして、大変嬉しく思っております。有り難うございました。この方は先生にもこれまでに何度となくご心配をお掛けしてこられたご様子で、気掛かりにお思いでいらっしゃるでしょう。まずは2度ほど『診断面接』にお越しいただきまして、充分にお話しを伺いました。どうも掴みどころのない印象でして、お引き受けしたものがどうか判断の難しいものがありまして、しばらくその手応えを待ちましたところ、分析の中身は些か心もとないとしても、こちらに通い続けることで、某か心に握力が付くこともあろうかと感じられまして、又そのことが彼女にとっての分析体験になるであろう旨を伝えまして、先週より継続して分析セッションにお越しただいております。身も心も涙の氾濫でズブズブといった印象でしたのが、何かしらふっきれたのか安堵したためか、不思議にも元気に晴れやかなご様子で今のところはお通いです。

人は誰しも、人に頼ることの愚かさ
と人に頼らないことの愚かさの間を行きつ戻り

つしながらおとなに成長してゆくものでしょうかしら？この方の場合、どうもそこらのバランスがまずいというか、その生い立ちの事情からして、気丈さが頑なになりかねない危うさがございませう。自殺念慮もありますようで、放つことそして落ちることの被虐的な快感もございませう。彼女の心が己自身を掴み、抱えることを徐々に覚えてゆかれるといいのですが……。

それではいずれ又……。

ご機嫌よう。 山上 千鶴子



2003年10月1日

Prof. B.K.先生

ご機嫌いかがでいらっしゃいますか。今朝ベランダで水鉢のメダカさんたちのお世話をしている、ふと見上げましたら、空がもうすっかり秋の空なのでした。朝顔の花も最後の一輪を咲かせています。メダカさんたちも水草に卵を産まなくなつて、そろそろ水鉢の底にじっとしていることが増えております。季節の移ろいをちよびり哀しみながらも、今年の猛暑をも何とか生き延びて、よく遊んでくれてありがとうねえとメダカさんたちにお礼を言ったところなのです(!!)。…………

ここしばらく随分とご無沙汰致しておりましたが、そう言えば最近はとんと写真撮影に出掛けなくなりまして、以前のようにまったく我ながら嬉しそうだなあと思いながらも、つついあちらこちら友人らに自分の撮った写真を送り届けていたのがパタッと途絶えてしまっ

ております。先生にもお付き合いいただいておりますのに……。それでどうしたかと申せば、一眼レフカメラが双眼鏡に変わってしまったわけなのです。【日本野鳥の会】が主催するあちこちの探鳥会に足繁く通っております。双眼鏡の世界はまったくの自分だけの「見た見た！」の満足感ですので、どちらかという写真が趣味というのに比べるとややおとなしくなりがちですが、この嬉しさは何なのでしょうというほどにすっかりバードウォッチングに嵌まっております。

さて、小此木啓吾先生のご逝去につきましては既にご承知と思われませう。私は新聞紙上で訃報に接し、呆然としましたような次第です。ご病気でいらしたこともまるで知りませうで、近頃はまるでお付き合いもなく疎遠でございましたわけですから……。

ここで彼に対してどういう感慨を綴ればいいのか途方に暮れるわけですが、一つ懐かしく思い出されましたのは、ロンドンにお越しの際お目に掛かって親しくお話した折り、確かご一緒にアンナ・フロイト宅を訪問した機会にだったように記憶しておりますが、彼がおっしゃってましたのね。<いつの日か退職した後、こちらに来て、自分も(教育)分析を受けたい。それが夢だ……>って。それはついぞ叶わず果たせずに彼は瞑目あそばされたのですね。その真意は忖度しかねませうものの、誰よりも一番に誰よりもたくさん(!!)精神分析を渴望なされた御方であったと申せませう。それで真実どのような喜びを得られたのだったかしら、ぜひとも生前に伺ってみたかったとしみじみ悔やまれます。

私などは今尚自分自身を振り返り、折々に自戒を深めることがらがございます。それは、喜び(もしくは美)に限りなく接近することにおいてあまりにも自分が臆病すぎるといふこと。実を申せば、写真の趣味も、ヘブライ語講座も、それにバードウォッチングも、そうした自分の内なる縛り(臆病)との闘いなわけです。私の精神分析は自分自身・私そのものだと思いがありますので、尚これからも怯み臆する己自身を叱咤激励してゆかねばなりませんでしょう。そして日々の臨床において分析患者の方々なりスーパービジョンにおいでの方々なりの中に時折そうした私の中の臆病さをそれぞれのあるようを超えてゆく姿を目の当りにするととき本当に嬉しくかつ安堵いたします。先生からいつぞやご紹介いただきました※※大学の院生の皆さん方、現在も継続してお通いですの。本当に嬉しいご縁をいただきました。感謝致しております。‘分析のこどもたち’‘セラピイのこどもたち’と私は呼んでおりますが、実によく頑張っておいでです。私自身児童を対象にした臨床経験が帰国後は皆無というのも日本において精神分析的アプローチによる児童臨床について懐疑的(insecureという感覚)があったからでしたが、ごく一握りの方々が無畏に挑戦しておられて、熱心にスーパービジョンにお通いでして、日本的ないわゆる「お守り子守りのセラピイ」を脱却してゆこうとしておいでです。とりわけ感銘深いのが※※大学教育学部の院生の方の自閉症児の症例なのです。イギリスのこどもたちもすごい、でも日本のこどもたちもすごい！と内心驚愕しております。この日本の精神的土壌においてかくなる‘奇跡’と

もいえるようなことが起こり得ているという事実。それに胸が高鳴ります。クライニアンであることがこれほどに誇らしく思えることはかつてありませんでした。自分が生きてきたこれまでの軌跡、それには意味がなくもなかったという、それはまさに安堵です。ここ当分は私自身も健康を維持しながら、一人でも多くの「分析のこどもたち・セラピイのこどもたち」を育ててゆきたいものと念願致しております、それが私にとっての「我が人生を担う」ことになりましょう。

元来は、どうも良寛さんみたいに閑かに愚直に日々暮らすことが性に合っているみたいで。飼っているメダカさんたちを相手に‘哲学’したり、つまりは遊んでもらっておりますわけです。まあこんな調子で当分はいるのでしょ。それで「私の精神分析」がどんなものになってゆくのか、そして私自身がどう生きられたのか、或は生きられなかったのか、を見極めてゆくことになりましょう。

ではどうぞくれぐれもご自愛くださいませ、ご機嫌よう。 山上 千鶴子



2005年3月21日

Dr. H.A.先生

ご機嫌いかがでいらっしゃいますか。先日は「徳岡神泉」の‘蕪’の絵葉書を頂戴しまして、嬉しゅうございました。とてもいいですわねえ。私もこの方のお作は大いに感じ入るものがあり、好きです。展覧会の方にもお出掛けでしたのね。私も実に堪能致しました！

さて、例の「静岡精神分析セミナー」での講演ですけど、幹事役のMr.I.T.先生がご依頼の折、電話で私におっしゃいますには、「今の日本で山上先生のような方がいらっしゃるということは奇跡です！」ということにして、確かに自分でもよくまあと呆れておりますけれども、まあそれで口説かれたからというわけでもありませんけれども、皆さま方がどのような‘奇跡’を待ち望まれておいでなのかとちょっと気持ちが動きまして、出掛けてまいりました。まあ実際のところは、やはりと云いますか、「職能集団」としての縛りがあるといったそれぞれの事情は勿論でして、それはそれとして精神分析の未来を語るのは些か面映ゆいものがございますわけで。致し方ございませんので、いくらかでも「この指止まれー！」で精神分析の旗印に集われた方々に、私なりの信(faith)をお話しできればという思いで、「命の列なり(リレー)」を基調に、単独者の立場で語らせてもらった次第です。但し、この折の講演内容は、先生がお尋ねくださったように、いずれどこかに活字で掲載される予定はございません。

それでというわけでもありませんが、先生にご覧いただきたく、ここに同封しましたものがございます。実はちょうどこの講演依頼と偶然にも時期を同じくして、「メルツァー入門」翻訳を手掛けておいでのDr.K.N.先生より「解題」をぜひにというご依頼があり、どうせならこの際にと自分の記憶喪失の帳をちょっと開けてみたわけですから、期せずして、メルツァーを語ろうとして自分自身を語る羽目になりまして、つまりそうした人と人との結

び付きを証するとはこういうかたちでしか語れないものと改めて観念した次第ですが、まことに気恥ずかしい限りです。実はこの翻訳の出版予定が大幅に遅れそうで、それでちょっとお先にと静岡でもお読み致しましたし、先生にもここにお届けする次第です。一応面白い読物になってるかとは思われますけれども…。

この時期に来し方の25年を総括することは、やはり私の一つの節目というか、これからを見据えての新たな始まりを余儀なくされてるようにも思えます。もしかして「これから」を語るには、いずれ10年後にでも…ということになるのかも知れませんけれども。概括的にはおそらく「贖い(atonement)・自分への立ち還り」がキーワードになるだろうと考えております。贖いの道、贖いの術(すべ)、贖いの器といった、即ち己が義とされる場への立ち還りを「精神分析」の骨子として語るということは、どうも今ひとつ時流には即さない嫌いがなくもなく、どちらかと言えば、こうした旧約聖書的彩りの濃い術語は敬遠されておりますようで…。だからこそ「精神分析」というものがいよいよ腑抜けたものになってゆくと、実は内心深く危惧していたりも致しますわけです。

しかしながら、これはもはや私個人の悲願やら祈りなのだと云ってもいいわけで、従いまして誰彼に声高に述べることもないと覚悟しているのです。いずれにしましても自分がどういう結び付きを生きているのか、生きてゆくのかと問われていると思われま

精神分析家を生業にしているという現実には身の縮まるような怖さがございます。それにしても、先日の「日本精神分析学会」の大会などはもはや見世物興業と化しているとか云いようのない。そのお気楽さは悲劇というか喜劇というか。何ら興味を覚えませんの。

一方で何故にか今やメルツアーの翻訳ものが出回ろうとしており、私もそこに参画すればいいのかと云えば、それも違う気がしているのです。やはり飽くまでも単独者の立場で、個々人との関わりにおいて語り掛けを続けてゆきたい所存であります。それが命の列なりを担う者の矜持であろうとも思う次第です。

サミエル・ベケットの「ゴドーを待ちながら」ではありませんけれども、でも実はまさにそれなのかも知れませんが、精神分析というものに「光」を仰ぎみる人たちが確かに一人ならずとも居る限り、彼らの手の届くところに、私は居たいものだと思念してまいりました。しかしながら現実にはどうも動きが取れません。職業別電話帳での広告も撤退しましたし、では新たにいずれホームページでというのでもどうもありませんし……。どこかで私自身がとても気難しい印象を深めているのかも知れないといった気は薄々しております……。例えば「分析の子どもたちの同盟」とやら「Analytical Brothers & Sisters の契り」とやら、内心深く想いを募らせているものですから、どうも独りで空回りして行くのでしょうか？！といった反省がなくもありません。

今や危惧しておりますことは、日本に

おける大方の皆さま方の心理臨床の現場の実態に自分が疎くなることであり、その点から申しまして、実は例のいつぞや先生からご紹介のありましたケースのような、実際に分析治療には箸にも棒にも掛からない、しかしながら途轍もなくインパクトの強い、なかなか忘れ難い、そうした方々との出逢いと学びの機会を私は逃しているんじゃないかという懸念を募らせておりますわけで……。ちょっと正直申し上げて、途方に暮れております。あと10年という臨床ができるのか。そして実際に何人の方たちとお付き合いができるのかと……。

さて、それはそれとして、私の趣味の写真の方、これが頓に勢いづいておりまして、今やデジカメ一眼レフに夢中です。その成果をこれ迄も折々先生の方にもお届けしておりましたが。その都度、思いがけないことにお褒めの言葉を頂戴したりで、なんとも気恥ずかしいながらも、励ましを戴いておりますことをただ無邪気に嬉しがっておりましたような次第なのですが。それが何故かしら、ひどく不思議というか、最近突如として私の「カメラアイ」が弾けた（?!）みたいなのですね。これはおそらく私の中の「精神分析的言語」と連動してない筈もありませんでしょうから、是非にもその展開なりその行く末を臨床の場で見据えてゆきたいものと些か興奮を覚えておりますところなのです。この成り行きにつきましては、いずれご報告させていただきたく存じます。それでは、どうぞご機嫌よろしく。

敬具

山上 千鶴子

.....



2005年5月15日

Dr. I.Y.先生

先日はお久しぶりにお葉書を頂戴いたしまして、先生が「※※大學人文学部」の教授にご就任あそばされました由伺いました。誠におめでとうございます！クライン派としての自負と気概の備わっておられます先生にとって、おそらくまた一つ‘新天地’の開拓になりますのでしよう。

精神科医療に携わる日々の臨床で出会われる患者さん方は勿論のこと、大學での先生のご講義をとおして、学生の皆さん方お一人おひとりが、かつての若かりし頃の私がそうでありましたように、どうしても「生きられなかった自分」がこうして「生きられた私」になれるとなりますことの機縁を一つなりとも掴まれますようにと念じられます。どうぞご尽力下さいませ。

『精神分析』の歴史は今やますます振り返りの必要な時期にきておりますような…。クライン精神分析学派の理念を煎じ詰めますなら、どうしても「同胞愛」に辿り着きましょう。それは国籍を問わず、クライニアンを任ずる者に通低する或る種の‘願掛け’ではありませんかしら。それは先生にとってもまた必定かと…。

『クライン精神分析』を擁護する者とは、人それぞれの内なる疲弊し自壊する魂に「何故？」を問う者として在るということに尽きましよう。即ち、フロイトからメラニー・クラインへ

と引き継がれた「死の本能」との闘いの旗手として在るということが眼目なのです。メルツアーもビオンも然り。心の内的破局をくい止めんと闘い、その固有なるいのちを甦らせんと奮起することなのであります。そもそも【精神分析運動】の要諦とは本来そうしたものの。この「精神のリレー」こそ、しかと受け継がれねばならないと私は念じてやまないのです。

「治す・治される」といった臨床場における治療関係ではもはやなく、「生かし・生かされる」関係を、先生がこれから教育の現場でお若い健康な学生の皆さん方と共々ご自分のうちにどう養われ培われてゆかれますか愉しみであります。ぜひともご健闘いただきますように。そしていつしか先生の惜しまぬご努力が嬉しくも報われますよう願ってやみません。

最後に、これからの先生のご活躍をお祈り申し上げながら、こんな箴言はいかがかしらと思ひまして、お届けいたしましよ。

「わたしを食べる人は更に飢えを感じ、
わたしを飲む人は更に渴きを覚える。…」
シラ書(集会の書) 24:21

そのような人間の叡智を耕し拓くところの「智慧のことば」を、私自身がこれから心理臨床家としてどこまで希求し続けてゆけますかどうか、なにやら肅然とした思いが致しましたもので…。

これは実にメラニー・クラインが折々に唱えるところの認識愛(epistemophilia)に

も繋がりませんかしら。因みに、彼女とほぼ同じ時代を生きたオーストリアの小説家ロベルト・ムージルに、こんな言葉がありましたの。

「知とは現れることを欲し、単なる隠れた存在には甘んじないというのがその属性である。知が彼を感動させるや否やそれが自分にとって単なる所有物と化さぬよう、さらにその光をいやがうえにも放射することを望む。……」

なんとという慰めかと思いましたのね。自己忘却の麻痺的状況からの脱却が意図されておりますような…。ほんと、油断してはなりませんわね。徹底徹尾「思い出せ！目覚めよ、生きよ！」ということでありましょう。

ともに精進してまいりましょう。

では、ご機嫌よう。

山上 千鶴子



2007年11月18日

Prof. B.K.先生

大変にご無沙汰いたしております。先日は「※※メディカルクリニック」の患者さんをご紹介いただき、誠に有難うございました。先生のお名前をととも久しぶりに伺いまして、とても嬉しくそして懐かしく思われました。ご壮健でご活躍のご様子、本当に何よりでございます。

さて、Miss.K.H.さん(診断名:抑うつ症、36歳)ですが。最近珍しいと云いましょうか、実に新鮮な衝撃を覚えました。彼女という存在そのものが、難易度で申せば、かなり上位クラスの

‘機密ファイル’といった感じでした…。出版編集に携わっておいでという職業柄、その複雑かつ巧妙な暗号技術は、さすが！と目を瞠るものがございました。否も応もなく、彼女とご一緒した2時間余りの時間中、私自身が、喩えるならば、或る種すざましい‘暗号解読マシン’になっておりまして、それはそれで幾ばかりか興奮でもあり快感でもありましたわけで。無論のこと、心を筋立てしてゆく過程で、彼女もそれなりに情報を提供していたわけですから、満更私の自分一人善がりの一人合点でもありませんでしょうけれども、何しろ本人自体は‘秘密鍵’を紛失もしくは隠蔽しているわけでした、即ちプロテクトが掛かっている状態ですから、‘共有鍵’を渡されない私側の‘暗号解読’は第三者の割り込み・覗きといった‘攻撃’でしかなく、その結果は残念ながら‘くたびれ儲け’といった印象を超えないまま…。このように、彼女という存在を解説するのに敢えて「コンピューター言語」を導入しなければならないことが問題の核心です。「人が人でなくなるとは？」そして「人が人であり続けるとは果たして如何なることなのか？」と思案しておりました。心理臨床家としての自らの非力を苦く噛みしめながら…。

「私は誰のものか？」そして「私は私に何をしたのか？」という問いの設定が彼女の中に欠如していることが指摘されます。こうした問いに答えるべく糸口探しは、実に『精神分析』以外には無いわけでした…。ただ彼女がこうした問い掛けに耐えられるか、かつ応えようとするか否か？ 彼女の強迫症状は、親の‘支配的溺愛’に絡めとられた自らを奪還せんとする試み

でもあり、しかし同時に或る種自ら(そして親)への復讐の意味を持つものと思われます。要するに、自分がオモチャにされたから、今度は自分が自分をオモチャにするといった具合に(!)。彼女は「私なるもの」の剥奪感を訴えている。「誰も‘ワタシ’を聞いてくれない、私は‘ワタシ’を聞いてもらえない！」という嘆きと憤りで凍り付いている。しかし、とことん‘一人’になぞなりたくないとしたら、心底私自身を生きてみたいと願うことを恐れ拒み続けるならば、おそらくは今の自己乖離状況に甘んじ続けるしかありませんでしょう。

面談を終えるに当って、再びお目に掛かることはなからうと判断されまして、彼女がこれからお独りで老いた親御さんを抱えてゆくご苦勞をお気の毒に思われました為、早急に親の介護支援体制を整えることを指摘しておきました。総て己の身に降りかかる事柄は自分が最初でも最後でもないこと、でもいつ如何なる時も徹底してワタシが肝心要であるということを補足してお話しておきました。すると、どうやらご気分が落ち着かれたのか、去り際、妙にニコニコと愛想良く振舞われてお帰りでした。その後ご連絡はいただいております。以上、ご報告申し上げます。

やはり正直申しまして、ここ28年近く私がいかなる意味でも心理臨床の‘即戦力’にならないことを日頃から悩み心苦しく思ってきました。唯今は「ワタシを聞いてもらえる！」ことを喜びとなさる方々が僅かながらもお越しです。それで充分とは云え、一方で、誰の眼にも分かり難い不可解な人としておそらくは忘れられたまま自分が終わろうとしているという懸念もあり……。

それで自分への申し訳にも、この夏ひよんな機会がありまして、こちらで態度表明を自らに課した次第です。京都でDr.H.S.先生が主催なさっておいででの精神分析セミナーにお招きいただき、講演してまいりました。メルツァーを語るというテーマでしたが、内容は「精神分析家とは何か？」そして「精神分析的話法とは何か？」でした。ここに、ほんの一部その際に読み上げました私の書き綴った文章のコピーを同封させていただきました。此の度ご紹介いただきましたお礼というのもまことにささやかで恐縮でございますが、お暇な折にどうぞお読みいただきますように。当初は書評でしたのが、エッセイになってしまったので、どうかと思ひ、未だどこにも発表しておりません。当日聴衆の皆さんの或る一部の方々からは予想を超えた反響を頂きまして、嬉しい戸惑いと気後れを覚えましたけれども。それはそれとして…。真実、虚しいことは厭だあ！と、徹頭徹尾それにこだわってますものですから。それで虚しさに逆らうべく、今や「懐かしや！愛おしや！」といった情感を頻りに追っかけております。自分の内やら外やらに……。

奇妙なことに、つい今頃になって、ロンドンから運び込んで段ボール箱に封印したままの過ぎし日のロンドンの子供たちの症例記録を開こうとしておりますの！たくさんの生命たちが私の裡で蘇るのを待っているのやも知れませんが。そんなわけでありまして、まだまだ当分これからも元気で頑張っている所存であります。

どうぞ先生もご自愛なされましてお励みいただきますように。では、ご機嫌よう。

山上千鶴子

.....